弘法大師御傳記

特106
495

始

特106
495

弘法大師御傳記

大正
10.5.16
寄贈

藤生觀著 寄贈本

◉ 正誤

第一頁二行目ノ中ハ　仲

第六頁七行目ノ聞くノ次ギニ　ガヲ加フ

第十五頁二行目ノ學費ハ　資

第十八頁九行目ノ讃嘆ハ　歎

第二十頁終リノ大師ノ次ギニ　ガヲ加フ

第廿一頁初行せらるノ次ギニ　るヲ加フ

第廿一頁終リノ僧侶ハ　僧俗

第廿四頁二行目ノ帝國ハ　國內

第廿五頁初行ノ大造ハ　大道

第廿六頁五行目ノ云ふハ　云ひ

第廿八頁十行目ノますハ　ませう

第廿九頁初行ノのハ　除ク

第卅四頁四行目ノ富留ハ　樓　又さればハ　ど

第卅七頁二行目ノそれをハ　は

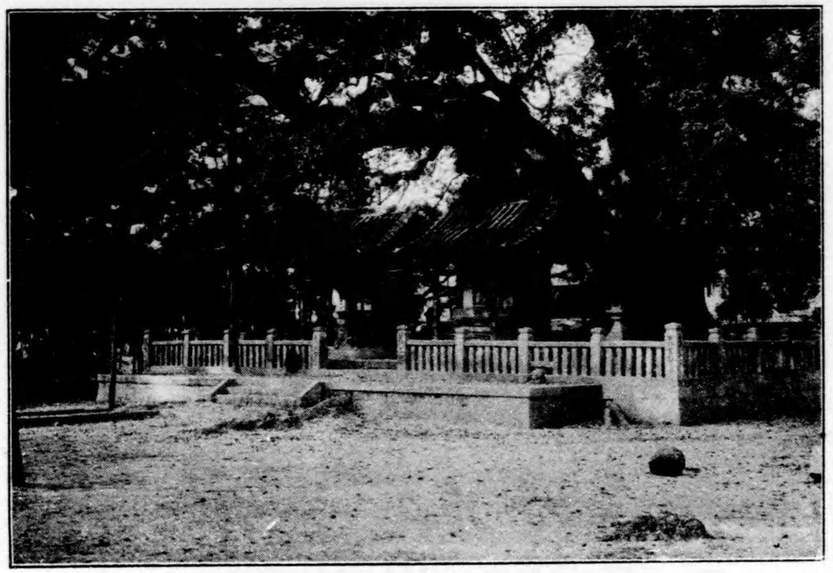
第卅九頁初行ノ講賛ハ　讃

第四十五頁十一行目ノおりなさりハ　おなりなさり

第四十六頁十二行目ノ成ぜハ　成功せ

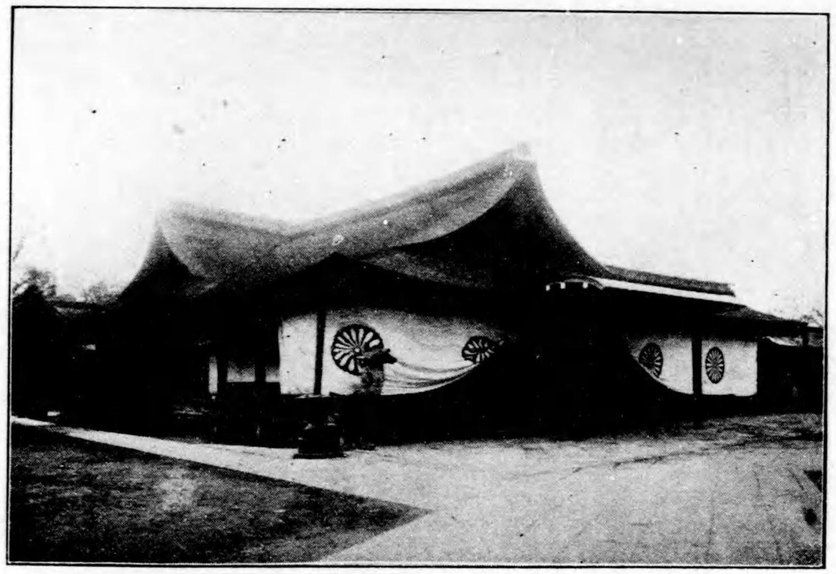
第五十二頁二行目灌頂の次キへ　の壇に入り、十二月重ね て胎藏界の灌頂　ノ十字ヲ加フ

第六十四頁九行目ノ大慈悲ノ次ギニ　心　ヲ加フ

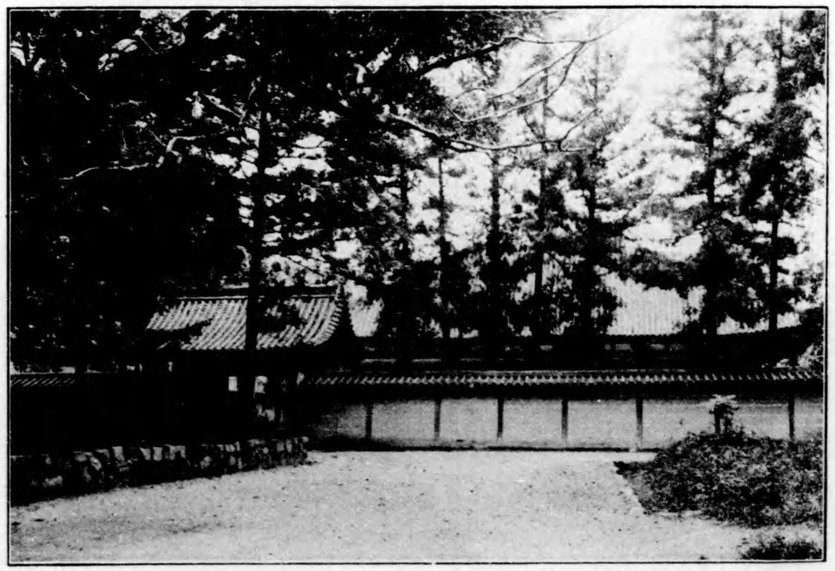


御誕生所善通寺樫樟樹

善通寺御影堂

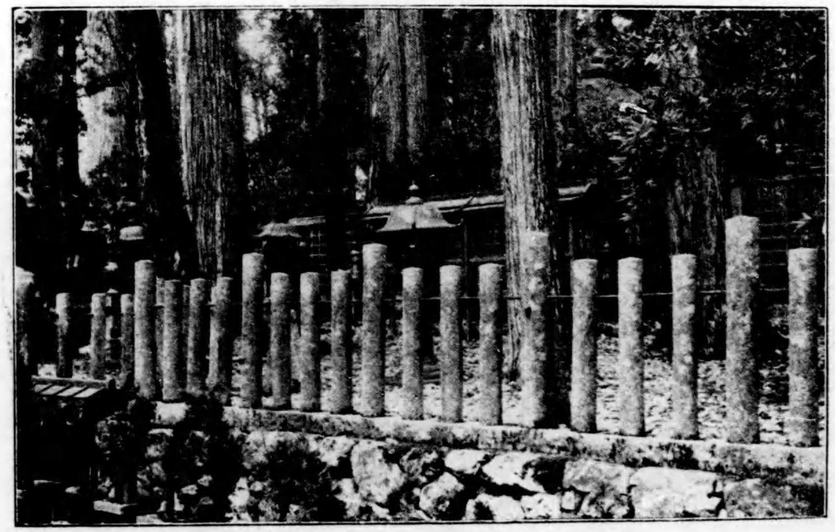


東寺御影堂



東寺灌頂院

高野山三鈷松并御影堂



高野山奥之院

弘法大師御傳記

目次

口絵
御誕生所善通寺櫻樟樹、御影堂……一
東寺御影堂、灌頂院……二
高野山御影堂、奥之院……三

序文……一

一、屏風ヶ浦御誕生……一
二、御誕生當時の環境……四
三、青年時代の御修養……八
四、壯年時代の御修養……一一
五、在唐三ヶ年……一四

六、開宗の御準備……二二
七、眞言宗の立敎開宗……二七
八、清凉殿の八宗論……三二
九、大師の御著作……三七
十、眞言宗根本道場の確立……三九
十一、珠の如き御人格……四三
十二、嵯峨天皇の御叡信……四七
十三、傳敎大師との御道交……五〇
十四、いろは五十音の御製作……五三
十五、四國八十八ヶ所靈場……五六
十六、御巡錫の遺跡……六一
十七、大師の庶民敎育……六四

十八、大師の國家觀……六七
十九、大師の社會事業……七一
二十、兩部神道……七五
廿一、大師の書道……七八
廿二、繪畫と彫刻……八一
廿三、大師の十號と十像……八五
廿四、高野山御開創……八七
廿五、大師の御遺訓……九三
廿六、高野山御入定……九六
廿七、大師の靈光……一〇〇

目次終

序

我が、高祖弘法大師、法の諱は、空海、遍照金剛と號す。其の靈德の各宗教派の上に在つて、無比獨尊なること、猶ほ太陽の衆星に於けるが如し、大師、曾て、桓武天皇の詔命を蒙むり大唐青龍寺惠果和上に從つて、秘密灌頂の壇に入り、法身大日如來の親授せし兩部大法の印璽を稟け、現身に顯得成佛の位に陞り、歸朝して我

が眞言宗を開き、高野山に入定留身ましませり
大師は創世以來萬世不可侵にして地球上唯
一なる、我が日本帝國が生みたる大偉聖なり。宜
べなり。古賢異口同音に、大師を稱して、我邦の
釋迦尊と讃歎せしことや、故を以て、古今を貫ぬ
き、十方を通じ、宗の内外と、教の異同とを問はず
大師の靈德に歸依し、恩光を渴仰する者、日に
新たにして月に盛んなり

居を高野の樹下にトし、神を都卒の雲上に遊
ばし、日々の影向を闕がさず、處々の遺跡を檢知
す、こは、大師が大慈大愛の佛眼もて、我等衆生
を鬱はし、虛空盡き、衆生盡きなば、我が願も盡き
んと立て給ひたる、誓願より出でし御垂語なり
然らば此の御傳記を讀む者は、徒誦空唱の弊
に陷らず、克く大師の靈光と、誓願の所在とを體
得して、歸依の心、渴仰の念を向上し、以て、三業の

淨化を進め、凡聖不二の安心を誤らず、卽事而眞の道と、三世因果の理を信じ、特に極端なる利己的個人主義及び危險なる惡平等の邪路に惑はず、國家擁護、社會互助の誠意をつとむ可きことを希ふ

大正十年二月二十一日

高野山金剛峰寺座主

大僧正　法　龍

弘法大師御傳記

蓮生觀善著

一、屏風ケ浦御誕生

偉人は青山白水の鄕に生れ、風光秀麗の地は宗教藝術の搖籃であると申しますが。眞言宗の開祖たる弘法大師は瀨戸内海の明媚を集めたる、讃岐の國中多度郡屏風ケ浦に呱々の聲を擧げられました

父君は佐伯善通卿と云ひ、御母は玉依御前ともうします。佐伯家の祖先は神武天皇御東征の時、大勳を立てゝ道臣の名を賜ひ、景行の御時に日本武尊を補けて東夷を征し大功あり、允恭の御時讃岐の國造に任ぜられ、善通卿はその第二十三代目に當る御方である。御兩親は神佛崇敬の念厚く、家門は富み且つ榮え、善を行ひ慈を施し、

德は道を以て高く、富は義を以て榮え、民人皆父母の如く敬ひ親しむと云ふ有樣でありました。所が寶龜四年七月の七夕星が鵲の架けた天の川の橋を渡ると云ふ頃、夫婦高樓に登りて月を眺めつゝ俱に一睡を催されしに、夢に天竺國より聖人飛び來りて懷に入ると見て、それより身の重きことを覺えさせ給ひ、十二ヶ月を經て、寶龜五年六月十五日御誕生遊ばされたのであります。その時室内に金光輝き、紫雲棚引き、異香薫り、歡喜の聲殿上殿下に充ち滿ちたと云ふ事であります

大師の御兄弟は五人にて、長兄の道長と云ふ人は佐伯家を相續せられ、一人の姉君は瀧の宮の宮司たる菅原家へ嫁せられました、智泉大德は此の御方の子である、又弟が二人あつて、一人は眞雅僧正であり、一人は眞然大德である、今一人の御妹は天台宗の祖師たる智證大師の御母であります。この外大師の御一族には此頃偉い人が一時に澤山輩出せられました、第一に伊豫親王の侍講たる阿刀大足の如き、東寺第一世の長者たる實慧大德の如き、海印寺の道雄大法師の如き、又、博士佐伯豐雄の如き、佐伯宿禰正雄の如き、正五位葛野酒麻呂の如き、何れも當代に於ける傑出したる人々でありました

只今の善通寺は大師の御誕生所にて同寺の御影堂緣起には、『御父佐伯善通卿の御名を寺號として善通寺といへり』とあります。昔の屏風ヶ浦が今は善通寺町と稱せられす、善通寺は四國靈場第七十五番の札所になつて居ります、善通寺を又誕生院とも申しまの事にて、今に楠の古き大木が澤山あります。古來その靈跡を慕うて參拜するもの多く、同寺には尊氏將軍の逆修塔があり、法然上人の逆修塔もあります、親鸞聖人の自作の木像も納められてあり、歷代天皇の御爪髮塔も建てさせられてあります、道範宥範などの大德も長らく住居せられた事があります、西行法師は三ヶ年もこゝに參籠せられ、その時詠んだ歌が澤山ある、彼の山家集などは屏風ヶ浦にて書かれたものだと云ふ事であります

同寺の奥の院に祭れる祕佛の尊影たる大師の御影を瞬引大師と申します、その由來は宮中にて御影を叡覽に供へたる折り『またゝき』せられたと云ふ靈驗に基いて起つた名稱であります。此の尊影は大師御入唐に際し、邸内の池に御姿を寫し、その御姿を描畫て母君に記念として止め給へる靈寶にて、庭前の泉水を今も御影の池と稱して居ります。大師御入唐の際は二十ケ年唐土に留學せられる御決心でありました、それを聞いて母君は非常に別れを惜ませられ、大師も亦老いたる母をあとにして八重の汐路に上る事を悲しく思召され、又の再會も期せられまじく、之れが今生のお別れになるかも知れぬと思へば、流石に求道の念烈々たる大師の御心にも、哀別の情止み難きものがあり、遂に記念の爲御執筆あらせられたのであります

二、御誕生當時の環境

偉人の活躍せる舞臺には毎に特種の背景があります、それは時代と云ふ事である殊に弘法大師の如く、社會の各方面に活躍せられた人の傳記を語らうとするには、その思想と事業とを育てあげた當時の社會狀態や、教界の有樣について十分考へて見なければならない。大師が大聲叱呼して叫ばれた祕密教の宣傳、並に教界の改革と云ふやうな事業は、當時の腐敗したる教界の其狀を知つて、始めて甚深の意義を理解する事ができるのであります。乃ち大師を產んだ時代及びその思想を培つた四圍の環境を知ると云ふ事が第一に必要だと思ひます

大師の御誕生當時に弘まつて居た宗派は三論宗、法相宗、華嚴宗、倶舍宗、成實宗律宗の六宗派でありました。それらの六宗派が南都七大寺に於て盛んに研修されて居たのであります。併し奈良の六宗派は宗教と云ふよりも寧ろ學問と云ふ方に傾いて居りました、支那又は朝鮮より傳へられたるその宗々の教理を學問として研究するのみにて、聖德太子當時の如き潑溂たる大乘的精神の光輝を著しく亡はれて居たのであります

されど支那より移された文化は奈良朝に於て燦然たる光を放ち、佛教は朝廷の特別なる保護に浴し、朝野の思想界を風靡し、宏壯なる堂塔は各所に聳ゆるの盛況を呈し殊に僧侶は支那の事情に精通し、新智識に富めるより、自然の勢ひとして政治に干與し、之れと同時にその恩寵に馴れたる僧風は次第に頽廢に赴き、上には玄昉、道鏡の如きあり、下には賣法の妖僧續出して愚民を惑はし、大寶令の發布となり、僧侶の行狀を政府に於て直接取締る事となりました、けれ共それでも僧風は紊れるのみにて改まらない、そこで寶龜十一年には更に勅して、『聞く如くんば緇侶の行ひと俗と異なるなく、上は無上の慈敎に違ひ、下は國家の通憲を犯す』と戒められ。延曆四年重ねて『今衆僧を見るに多く法旨に乖き、或は私かに檀越を定め、或は佛驗を誣稱し、愚民を註誤す、唯だに比丘の敎律を愼まざるのみならず、そもこれ所司の捉搦を勤めざるなり、嚴禁を加へずんば何んぞ緇徒を整へん』と峻嚴なる詔勅を下させられ。大師は又、『あらゆる僧尼頭を剃りて欲を剃らず、衣を染めて心を染めず、戒定智慧は麟角よりも乏しく、非法濫行は龍鱗よりもさかんなり』と嘆かせられたほどに當時の敎界は墮落して居たのであります

斯くの如く一面には僧侶の行狀が甚しく紊れて居たのと共に、一面にはその敎義信仰上に大なる缺陷があつたのであります。大師が南都六宗を評して、『唯だ文を誦し義を講ずるのみ』と仰せられたるは、溫き信仰と熱烈なる信念を缺いて居る事を諷せられたのである。三乘十二部經に疑ひありと仰せられたるはその缺陷を指摘せられたのであります。併し一般民衆の生ける溫かき信仰を求むる淸き要求はいつまでも斯うした廢頽せるまゝにして捨てゝは措かない、偉人の出現を望む事旱天に於ける雲霓の如きものがあつた。此の要求に應じて偉大なる改革者として出現せられたのが我が弘法大師であります。大師の出現せられたる寶龜五年には彼の帝位を覗うた怪僧道鏡は下野の配所藥師寺に歿し、顧れば後年の道友たる傳敎大師は既に八歲の夏を迎へて居たのであります。そして丁度その時は奈良の都を京都へ遷し、思想界に一轉機を畫

し、清新の氣は上下に漲り、政治上、信仰上、文化上の中心が舊都より新都へ流れる際にて、靈界の使命を荷へる我が大師は此の機運に乘じて教界に新生命を賦與し、內外兩面の弊風を刷新すべく重大なる使命をもたらして出現せられたのであります

三、青年時代の御修養

青年時代といつても二三歳の頃より二十歳までの御事蹟、卽ち幼年時代、少年時代青年時代を一括して陳べるのであります

大師は幼名を眞魚と申し、栴檀は二葉より香ばしの譬へにもれず、聰明にして他の群童と異なり、二つ、三つの戯れにも泥土を以て佛像を造り、禮拜供養の樣などを爲し、早五つ、六つにもなり給へば神童の聞え遠近に高く、時の人皆御名を呼ばずして貴物と申したと云ふ事であります。七歳の時捨身ケ嶽にて大誓を起し、深き谷間へ身を躍らし給ひしに天人降り來つて救ひ上げられたと云ひ。九歳の御時巡察使が道に大

師に遇はれしに四天王が天蓋を捧げて擁護せるを見て驚いて馬を下り拜せられたと云ふやうな事は、皆之れ大師が御幼少の頃より並々ならぬ御行爲のありしことを傳ふるものであります

大師は御名門の御生れにて、殊にその一族には博士、學士などの學者多く、それが爲め大師は小さい時より學問修養に勉められ、十五歳の時母方の叔父たる阿刀の大足に連れられて京都へ學問の爲め上られ、四ケ年程大足の膝下にて薫陶を受け、十八歳の時早くも大學に入り、毛詩尙書を味酒の淨成に學び、左氏春秋を岡田の博士に聞き夜を日についで大に勉强せられました。が、學問が上達するにつれて豫てより心の裡に萌せる求道の念は春の木の芽を吹き出すが如く、當時の新思想たる佛敎の敎理と信仰に對して深き憧憬を感じ、勤操大德に面語して以來一層の熱烈を加へ、諸博士より排佛的訓誨を聞く每に大師の御心にはそれが反對の意味に響かれ、大師はつら〳〵思ふよう、年頃我が習ひ學べる儒書は皆なこれ人の糟粕にして、且つ目前淺薄の事のみ

なり、身死し骨朽ちたる後に於て何んの詮要かあらんと、因て三教指歸と云へる書物を著はして佛教と儒教と道教との優劣を批判し、入佛出家の本懷を宣言し、大忠、大孝の意義を論じ、恩愛の絆を切り、學校の門を辭して蹶然近士となり、練行の途に上り、佛道修行の三昧に入られ、深山にこもりて佛を念じ、幽谷に入りて法を行ひ、苦修練行を專らにし給ひしかば、神明佛陀の感應ありて、或時は阿波の國大龍の嶽に登りて頻りに修念を凝らし給へば虛空藏菩薩の大劍飛び來りて靈應を表はし、又或る時は土佐の國室戸の崎に荒磯に打ち向ひて深く三昧に住し給へば明星口に入りて佛力の奇異を感せられ、愈信心肝に銘じ、倍々苦行に感興を覺えらるゝに至り。爾來大師は雲の如く南北に來往し、霞の如くに東西に漂遊し、或時は土州の「あしずり山」にて天狗問答を爲し、或時は伊豆の桂谷にて魔緣を退散し、或は播磨の國にては行基菩薩の弟子の家にて老嫗に鐵鉢の供養を受けられた抔と云ふやうなことは皆此頃の事であります

斯くの如く大師は十九歳の春より二十歳の初めに及ぶ一ヶ年餘りの間に、四國を遍歷し、中國地方を巡遊し、更に大和、紀州、河内等の近畿の巒峰を踏破し、足を轉じて東海道方面に向ひ、伊豆半島にまで及ばれたのである。無論それは雲水に等しき旅行にて、樹下石上に露宿を爲し、或は草葉木實に餓を凌ぎ、嚴冬の深雪、炎暑の猛烈に心身を苦修練行せられ、以てその欝勃たる覇氣を慰め、勇英の氣を練り、煩悶と逆境と懷疑の關門を透開すべく奮闘せられたのであります

四、壯年時代の御修養

大師は一年有餘の修行と遊歷とにより心身の爽快を覺え、心内の煩悶大に洗淨せられたると共に、三寶尊信の念愈強きを加へ、遂に二十歳の時和泉の國槇尾山に登り勤操大德に從つて剃髪出家し、沙彌戒を受け名を敎海と改め、愈佛門の人となり、專ら佛典の研究に心を潛められました。尋で名を如空と變へ、翌年更に空海と改め、

二十二歳の時南都東大寺戒壇院に於て具足戒を受けられ、こゝにいよ〳〵一人前の本當の僧侶になられたのであります。それより專ら一筋に佛を禮し、經論の研究に力め佛教の祕趣奥底を極めんとせられましたが、こゝに多感鋭敏なる大師の御心を強く刺戟する三つの問題が展開せられました、それは一は桓武天皇の平安遷都である、二は傳教大師の叡山開創である、三は佛教研究上の大疑團である。特に第三の佛教研究上の大疑團は大師をして煩悶懊惱を極めしめたのであります。大師は心身の關係に就て法相三論の如き淺薄なる教説に甘んずる事がどうしても出來ない、そこで大師は東大寺大佛殿に籠りて懇誠を凝らし、

『我れ佛法に隨つて常に法要を求むれども、三乘十二部經、心神に疑ひあり、未だ決せず、唯だ願くば十方三世の諸佛我れに不二を示し給へ』

と祈り、爾來不二の法門を求むる事前後八ケ年の久しきに及びました。大日經が早くより我國に傳はれる事は疾くに聞知せられしも、何れの寺に存在するや明かでない、

されど近畿地方の内に存在するに違ひなき事を信じて、近畿の諸大寺を一々探尋せられたれども、どうしても見出す事が出來ない

こゝに於て暗雲は再び大師の御精神を覆ひ、失望の餘り怏々として煩悶の歳月を數ケ年の間送られました。三教指歸を改訂發表せられたのは二十四歳の冬にて、その後或は槇尾山に繪畫彫刻を修習し、或時は魚養に從つて書道を研究し、或は金剛山、吉野山、葛城山及紀州の諸岳を跋渉し、或時は伊勢の大廟に詣でゝその書庫を閲覧し、或は四國東北の山水を踏破して深邃の靈氣を吸ひ、或は阿波の大龍寺を建立し。斯くて一方には絶えず華嚴、法相、三論等の玄理を研究すると共に、諸經論を讀破して不二の法門を探尋し大日經の所在を孳々、尋ねて怠らない。之れを傳へ聞くもの何れもその熱誠に感激せざるなく、南都諸大寺の間に於て勤操門下の偉材として次第に重きを爲し、名聲大に上り南都僧界の重望と囑せらるゝに至りました

此の不二經探求の八ケ年は失望の時代なりしと共に、又御一代中に於ける最も有意

義なる修養時代にあらせられたのであります。大師は最後に至り佛前に大誓を起して『我れ不二の法門を得ずんば此の座を起たず』と丹祈を運び給ひしに靈夢を感じ、遂に大和國高市郡久米寺の東塔の大柱の下に於て大日經七卷を感得せられました。こゝに始めて多年の宿望を達し、大に歡喜せられしも、さて之れを繙いて見るにその意義解し難く、敎文の幽趣を知る事が出來ない、大師は之れを、『衆情滯りあり』と仰せられてあります、依つて之れを南都諸大寺の高僧碩學に尋ねて見たけれど誰れ一人之れを解する人がない。こゝに於て入唐求法の念鬱勃として禁ずる事能はず、遂に入唐求法の決心をせらるゝに至つたのであります

五、在唐三ヶ年

大師は延曆二十三年の八月に唐土に着し、その翌々年の八月に歸朝せられましたから、三ヶ年とは云ふものゝ滿二ヶ年しか滯留せられなかつたのであります。始めは二

十ヶ年間留學する積りで御出發になつたのでありますが、種々の事情で歸朝の期を早められました、それは同行の傳敎大師が早く歸られたと云ふ事や、學費の支給が少くて困窮せられたと云ふ事もその一因かも知れないが、その外に二個の重大なる事由があると思ひます。一は惠果和尙が早く鄕國に歸りて國家に奉じ天下に流布せよと遺命せられたると、今一は學ぶ丈け學び盡したるを以て、此の上長く他鄕に居つても詮がないから、之れまで修めた所を以て復命しやうと思ひ決められたと云ふ事である。その事は日本遣唐使に與へて同船歸朝を求められた御手紙にさういふ事を陳べられてあります

大師は天台宗の祖師傳敎大師と同時に入唐の途に上られたのであります。延曆二十三年七月六日四船相連れて肥前の松浦郡田浦を發しました、第一船には遣唐使藤原朝臣葛野麻(可能とも云ふ)副使石川道益、留學生橘逸勢、及び我が大師等が此の船に乘り込まれたのであります、第二船には遣唐使判官菅原淸公、及び傳敎大師等が乘ら

れ、第三船にはまた判官三棟令嗣等が乗り、第四船には諸役員が乗つて居りました。
處が琉球沖邊にさしかゝりし時大風浪に妨げられ、第三、第四の二船は航行が出來なくなり、殊に第四船はその行衛さへ分らぬやうになりました。併し幸に大師の乘れる第一船は海上三十四日間を經て無事八月十日に福州に着し、第二船はそれより二十一日間を遲れて明州の海岸に着しました、大師一行の乘れる船も元來明州卽ち今の浙江省寧波に着すべき筈なるに福建省の方へ着いたものですから、福州の刺史が怪しんで上陸を許さない、大使と刺史と再三書面を應答したけれど事情と意思がどうにも通じない、困り果てゝ大使より大師に囑して文案を草せしめられましたが、その文章は莊重懇切人情の機微を穿ち、大に彼の意に投じましたので、刺史の意忽ちに解け、一行を館に請じて優遇を極めました。その時の文章は性靈集に載つて居ります、それより刺史と長安城政府との間に再三交渉が行はれ、十一月三日に至り漸く福州を發し、十二月二十三日大使と共に盛大なる歡迎を受け長安の都に入城しました。處が傳敎大

師の乘られた第二船は遲れて着港しました、けれ共其着港地が明州なりしと、州吏の故障がなかつたのとで直に上陸が出來、早くも十一月十五日に長安に達し、傳敎大師は長安城に入らずして直に杭州に入り、天台山に登り、そしてその翌年の五月藤原の可能等が使命をとげて明州より船に乘らんとして居る所へ走せ付け來り、之れに同船して六月八日對馬へ歸着せられたのであります。それ故我が大師と傳敎大師とは彼の地にては一度も會見の機會がなかつたのであります

大師は長安に入りて橘の逸勢と西明寺に同居する事になりました、大師は同寺の僧等と俱に諸寺の高僧碩學を歷訪し、遂に當時密敎の中心たる靑龍寺の惠果和尙に目にかゝつたのである、當時密敎は帝室の宗敎としてその勢力盛大を極め、惠果和尙は不空三藏の衣鉢を受け、眞言正統の第七祖として帝室の護持僧として德望最も高く求法の輩雲の如く集り、辨弘、惠日、義明等の秀才多く、又代宗皇帝を始め皇族多くその門に入り、實に一代の師表として崇敬せられて居たのである。此の時に當り大

師は海外求法の小沙門たる身を以て突然謁を求めたのであります、處が和上欣然として之れを迎へ『我れ先づ汝の來るを知る、相待つ事久し、今日相見る太だ好し、報命喘〻として人の法を付すべきなし、速に香華を辨じ、灌頂の壇に入るべし』と、仰せられました。その時和尚は六十歳にして大師は三十二歳でありました、大師はかゝる高僧よりかゝる溫かき御言葉を承はり歡喜の涙に咽ばれたのであります

それより直に六月十三日胎藏界の灌頂を受けられ、七月金剛界の灌頂を受けられ、八月傳法阿闍梨位の灌頂を受けられ、遍照金剛と云ふ法號を此の時受けられました。大法の授受が目出度濟みましたからその日青龍寺に於て五百の僧を迎へ大齋會を行ひ法悅と讃嘆の聲は四衆の間に滿ち滿ちました。斯くて法會終るや和尚は大師に告げて『眞言の經疏は隱密にして圖畫を假らざれば相傳する事はず』とて、それより帝室技藝員とも云ふべき畫工、彫刻師、鑄造師等の諸博士を呼び集め、和尚の指揮の下に佛像佛畫、佛器、法具を書寫し、彫刻し、鑄造せしめられ、それらの品々を悉く大師に付

與し、又不空三藏より傳來せる佛祖嫡傳の眞言祕密の印信靈寶を悉く大師に付囑せられ、密敎の弘通を囑し、懇に慈誨を垂れさせられたのであります。こゝに於て大師は多年辛苦せし不二法門の源底を傾け盡し、出家の本懷、入唐の目的はこゝに全く達せられたのであります。心中の御欽びはどんなであつたでありませう、それと同時に恩師惠果和尚の遺業を大成し、滔天の偉業を畫せなければならぬと云ふ大責任は大師の双肩に懸り來つたのであります

斯くて惠果和尚は大師に大法を付囑し、やれ〳〵と御安心遊ばされたる爲めにやその年十二月十五日靜かに御遷化あそばされました。大師は和尚の御膝下に親しく隨侍したるは七八ケ月間の短期なれども、恩惠の廣大なる實に百世の師にも勝りたる恩師に一朝にして別れ追慕の念禁じ難く、せめてはその切なる情を慰し、師恩の萬一を酬ひ奉らんとて墓碑を建て、その碑文を自ら撰し且つ書してその至情を陳べられました、その文は性靈集に載つて居ります。その碑文を撰作せられたと云ふ事と、彼の五

筆和尚の美談とは、秀才雲の如く多き當時の唐土に於て、大師が如何に朝野に重きを爲し給ひしかを窺ひ知るに足る二大事實であると思ひます

追弔の營みが濟みますと大師は更に各宗の名師歴訪に出かけられました、先づ會稽の神秀大德を訪ね華嚴の章疏を傳へ、醴泉寺に於て般若三藏、牟尼室利三藏、南天竺の波羅門僧等に遇つて天竺の佛教に關する有益なる話や世態人情や、宗教事情を詳に聞き、又梵語を學び種々の梵語の原書を傳へられました。又不空三藏の御弟子たる曇貞和尚より梵字悉曇を學習せられました。斯く大師は密教の研究、梵學の研究に努めらるゝと共に、大に圖書の謄寫に力を用ひられたのであります。今御室仁和寺に傳はつて居る三十帖の策子などもその時書寫せられたもので、同窓の橘逸勢に手傳つて書いて貰つたと云ふ事であります。その時は大師も逸勢も學資が少くて困つたらしく、大師は越州の節度使に與へた書中に、『衣鉢竭きて人を雇ふ能はず、食寢を忘れ、書寫に勞す』、と仰せられ。又大師逸勢に代つて作られた本國の大使に與ふる書にも日本から支給せらる、衣料は僅に露命を繋ぐだけで束修讀書の用に足らぬと書いてある

それでも折角きたのだからと云ふので、唐土の文化に對し探求と研究を怠らず、凡ての方面に注意を拂ひ、繪畫、彫刻、建築、詩文、書法、造筆、製墨等より音韻學、菓子の製法等の末技に至るまで、その目に觸るゝ所、耳に聞く所、一つも漏らし給ふ事なく、悉くその妙を窮め幽を盡し、その多藝多能多方面なる、人をして驚歎措く能はざらしむるものがあります。言語を異にし、人情を別にせる、異國の人々に接して、その文化を研究し、その思想を咀嚼する事は實に容易の事でない。それを僅々三ケ年未滿の日子に於てかゝる多くの研究と功果を請來せられたと云ふ事は、偏に入唐以前の修養と學殖の甚深なりしに由ると申さなければなりません

大師はこゝに入唐の志願を達せられましたので、大同元年八月憲宗皇帝を始め朝野僧侶の知人に別れを告げ歸國の挨拶を陳べられました、之を聞き傳へて何れも別れを

惜み、或は詩文、或は金品、或は紀念物等心づくしの餞別を送られ、愈〳〵明州の津より上船せんとするに臨み、大師は三鈷杵を空中に投せられしに後、高野山にて之れを發見せられしを以て今尚高野山に三鈷の松と云へる芳躅が遺つて居ります。南院の波切不動明王は大師が恵果和尚の慈訓により自ら彫刻して之れを奉侍し海上安全を祈られたのであります。斯くて大師はその年十月無事筑前博多に歸着せられました。二十ケ年を期し命を賭けて異域に入りし身が、僅々二ケ年餘りにして所期の希望を達し、多くの珍書と重寶を携へて、再び故郷の山水を眺めた時の御心持は譬へ方のない喜びの情に滿たされ給ひし事と拜察致します

六、開宗の御準備

大師は大同元年十月唐土より御歸朝になりて、翌年の秋まで一ケ年の間九州筑紫に御滯在遊ばされたのであります。なぜすぐ京都へお上りにならなかつたか、なぜ九州に長らく御滯留あらせられたかと云ふについて種々の解釋があります。あるものは桓武天皇の御崩御に對する朝廷への御遠慮の爲めだと云ひ、又あるものは京畿地方に適當の根據地がないから自重して朝命を待たれたのだと云ふ。それもさうであつたかも知れないが、それよりも開宗御準備の爲に暫く閑地にありて多年の苦學と長航の疲れを慰し、靜かに英氣を養ひ、以て近き將來に大に滔天の偉業を畫し、法鼓を天下に鳴らさんとする爲に、且く上京を延ばされたと云ふのが眞に近いやうである

御在唐中に恵果和尚より眞言祕密の精要は細大洩らさず傳承せられたけれ共、何分にも短時日の間にて、正しく和尚より敎へを受けられたるは僅に五六ケ月に過ぎない從つて敎義並に信仰及び法式、儀禮等について、それを一通り整理を爲すの必要を感ぜられたのであります。敎義の組織、判敎の立證等は殆ど大師の御手によりて取りまとめられたやうであります。愈〳〵一宗を新に開くと云ふについてはそこに言ひ知れぬ苦心と用意と注意を要する事はいふまでもなく、第一に南都六宗に對する態度をどう

決めたものであらうか、傳教大師は天台の教義をどういふ風に宣傳せられて居るか、帝國現下の思想界の模様はどうかと云ふやうな點に甚深の御考慮は拂はれたあとが歴々として窺ふ事ができる。眞言宗の教義、眞言宗の信仰等に關しての腹案及び内容は此の一ケ年の間に組み立てられたのであります

併し大師は貴重なる時間を瞑想に耽つてじつとして居られたのではありません。此間にあつても種々の方面に活躍せられ、將來發展の途に向つて着々歩を進められたのであります。先づ第一に陛下に對し唐より傳へ來れる經論、諸書、佛像、佛器等の五百餘種の目錄を作り、それに詳しき復命書を添へて、遣唐使高階眞人の上京に托して奉呈せられました。その上表文の一節に、

『入唐學法の沙門空海申さく、去じ延曆二十三年を以て命を留學の末に含んで津を萬里の外に問ふ、青龍寺の灌頂阿闍梨に會ひ奉りて師主とし、肘行膝歩して未だ習はざる所を習ひ、頭を傾け足をさゝげて未だ聞かざる所を聞く、幸に國

家の大造を賴み、大師の恩慈を蒙りて、兩部の大法を學び、諸尊の瑜伽を習ふ此の法は則ち諸佛の肝心、成佛の徑路、國に於ては城郭、人に於ては膏腴なり、薄命のものは名をだにも聞かず、重垢のものは入る事能はず』

と云へるにて大師の意氣と信念の閃きを窺ふ事ができると思ひます。その上表に對して政府より翌年四月下旬太宰府の長官へ、『取り敢ず觀自在寺に假住せしめ鄭重に取扱ふやう』と云ふ意味の官符を下されました。此の觀自在寺と云ふは奈良の東大寺、下野の藥師寺と共に日本三戒壇と定められたる大伽藍にて、九州第一の大寺でありました。此の時大師は三十四歳でありました。大師の假住せられたるは其の四十九坊中の一院にて、風景の佳い閑かな寺でありました。その寺を後に弘法寺と云ひましたが、今は廢絶し、そのあとに弘法水と云ふが遺つて居ります。こゝにて千手千眼大悲菩薩並に四攝八供養摩訶薩埵の十三尊を圖繪せられ、信者の爲に佛事を修行せられました。その時の願文が性靈集に載つて居ります、觀自在寺へ移られる以前五六ケ月間は博多

の海邊にある勤行寺と云ふ小寺に居られたのであります、その寺が端なくも善無畏三藏の假住せられた寺だと云ふことを聞かれて、その不思議の因緣に感じ何んとかして伽藍を建て密敎最初の道場にしたきものと思ひ立たせられ、遂に太宰小貳八月麻呂の盡力によりて興隆造營せられ、出來上つたのが、則ち今の東長密寺であります

大師が嚴島の彌山に登りて、求聞持を修せられたと云ふ、賀春明神に參りて海上守護の神恩を謝せんが爲め、禿山を青山に化せられ、千株萬岩根に生ひ茂るに至らしめたと云ひ、其他今に九州地方に大師の御事蹟の點在せるは皆な筑紫御滯在中の御遺跡であります。斯くて待ちに待ちたる朝廷よりの御勅宣は大同二年の夏過ぎて秋の初め頃に至り大師の御手許へ屆きました、それは密敎宣布の勅許の御沙汰書でありました平安朝の新宗敎として、顯敎諸宗に對する改造の一大使命を荷へる大師の宗敎は、愈こゝにその幕を切つて落されたのであります

七、眞言宗の立敎開宗

不二の法門を日東に宣傳すべき使命を齎して歸朝せられたる我弘法大師は、大同二年の秋密敎宣布の勅許を得られたのであります。廣傳に、『この年入洛して請來せる聖敎を流布すべきの勅宣を拜す』と云ひ、集記には、『此の時勅により請來せる法文、道具、曼荼羅等を隨身して上洛す』とあります。そこで大師は筑紫より京都へ上り天皇陛下に詳しく入唐中の御復命を奏上し、それが濟むと一先づ和泉國槇尾山へ引取られ高雄寺へ住職を命ぜられたのはそれより三ケ年後のことであります

大師は、今や鵬翼成りて正に萬里の風に駕せんとし、その踊躍歡喜の情は眞に察すべきであります。大師が立敎開宗の第一聲を揚げられたのは大和國久米寺であります。大同二年十一月八日同寺に於て大日經疏を講ぜられ、一は大日經感得の昔を偲びその御法樂に供へんが爲め、二は密敎開宗の第一法雷を皷せんが爲めでありました。此の

大講演が成功の好果を齎すか、將た不結果に終るかは前途の運命を卜すべき重大の塲合であつたのであります。所が講演の結果は非常に良好でありました、久米寺流記に『歸朝の後同年仲冬八月龍象を雁塔に率ゐ、自ら大日經の疏を講ず、その時一萬餘の有勢の神その塲に影現して聽聞せらる、龍象には實慧、眞濟、眞雅、眞昭、堅慧、眞然等なり』とあります此の眞雅眞然等に付いては少し年代に疑ひがありますが、兎に角南都並に近畿の諸寺諸山の僧徒學侶が新歸朝者たる大師の講演、眞言宗立敎開宗の第一聲、難解にして久しく問題となり居りし所の大日經の講釋と云ふのでありますから多大の注意と感興を以てそこに多くの人が集りたることは想像に餘りあること丶思ひます。その際大師は蘊蓄を傾倒して南北七宗の未だ曾て說かない所の法身說法の幽旨も說かれたのであります、卽身成佛の大幟も飜されたのであります、兩部曼荼羅の哲學的大議論も叫ばれたのでありませう、それと同時に眞言宗の位地を明かにする爲に顯敎と密敎との區別を明かにし、その淺深優劣を論斷し、眞言宗の最も優秀なる所以の理由を說かれたのでありませう、そして一面には二敎論に陳べられたるが如き橫の判敎を宣示すると共に、他面には寶鑰に陳べられたるが如き竪の判敎も詳論して、滿堂の聽衆を驚倒せしめられたこと丶思ひます。その主張は南都北嶺の諸宗に甚大の刺戟と省慮と訓誨を與へられたことは申すまでもありません。それ以來大師は此の主張の下に各地に法輪を轉せられ、布敎傳道に奮鬪せられたのであります

大師以前の佛敎各宗は何れもその經論を外國から傳來した儘にて、何んの理解もなく、何んの咀嚼もせぬ、只之れを口に說き、筆に記し、身に行つたのみでありました之れその時代が先進文明の輸入、外來思想の吸收に忙はしかりし爲め、一も二も外國でなければ夜があけぬと云ふ盲目的模倣時代であつたからで、恰も明治初年の外國心醉時代と相似て居たのであります。併しかゝる狀態でいつまでも滿足されるものでありません、醉うた者は醒めなければなりませぬ、聖德太子の宣示された大乘的精神を發揚して、外來思想を我が國風に融合し、國利民福を謀らなければならぬと云ふ御遺

思を承け繼いで、佛教の面目を一新することは痛切なる當代の要求でありました。かゝる盲目的模倣の佛教を覺醒して、深刻なる自覺に基く佛教を宣傳せられたのが、弘法大師であります。之れを何に氣なく見れば矢張支那傳來の宗教のやうでありますけれども、我等は大師の弘教上の態度並にその御精神に於て深き且つ強き自覺の閃きを認めざるを得ないのであります。それは外でもない、深遠なる眞言の教理を巧に應用して國民性を理解し、加持祈禱を說かれ、神佛二道の融合に力められ、鎭護國家主義を叫ばれたことであります

大師の開宗當時は遷都早々にて政治的方面にも、宗教的方面にも、社會的方面にも一轉機に向つて居た時代で、人心の安定を缺いて居たのであります。その安定を謀ると共に、國民思想の統一を圖ると云ふことは當時の最も急を要した所で、大師は此の大業を翼賛することに種々の方面より勉められ、彼の南都佛教が非國民的行動のあつたのに反して大師の眞言宗は鎭護國家を標榜せられ、日本の眞言宗として、日本の國體に適應すべく立教開宗せられたことは最も注意すべき點にて、大師以後の諸宗派は何れもその影響を受けないものはないといつてよいのであります

大師は眞言宗を弘める爲めに種々の苦心と努力を拂はれ、第一には教義を闡明する爲に書物の著作に努力遊ばされました。第二には眞言の教義を宣布するの必要上堂塔伽藍の建立に努力遊ばされました。第三には講演、講經、加持祈禱等の直接布教に奮勵せられました。大師は一化六十二年の間孜々として此の三方面に努力せられたのであります。詳細の御事蹟は追々後に述べることに致しますが、只茲に一言申し添へて置きたいのは大師が眞言宗を立教開宗せられたのは、眞言宗の爲に眞言宗を弘められたのでない、國家の爲め、人類の爲に眞言宗を弘められたのである、眞言醍醐の妙教を弘むることが取りも直さず國家を安泰ならしめ、人類を幸福ならしむる所以なることを確信せられたのであります

八、清涼殿の八宗論

久米寺に於て眞言の教義を宣言せられてより、大師は東西に宣傳し、南北に法輪を轉ぜられ、教勢大に揚り、信徒日々殖え、大師の名聲は恰も朝日の天に昂るが如く、主上の御歸依漸く厚く、傳教大師すら膝を屈して灌頂を受くるに至れるを見て、各宗の人々は心安からず、殊にその教義に對しては大に反對の意見を抱き、機もあらば後進宗たる密教の鼻柱を挫かんとの心は、言ひ合はさねど各宗の人々の胸の裡に漲つて居つたのであります。所がその機が參りました、それは弘仁四年三月十五日のことであります、嵯峨天皇は南北諸宗の碩德を清涼殿に召し、顯密の法門を論議せしめられる事になりました、之れ實に大師一期の晴れの舞臺にて、又密教根本の地位を定むべき大事の場合であります。大師は導かれて座につけばそこには法相、三論、華嚴、律宗、天台等の七宗の諸大德がずらりと並び、御簾の内には天皇出御ましまし、その

光景は森嚴を極めて居りました

衆僧は一齊に大師の方に向き直り、法相の僧は先づ口を切つて、如來一代の教文を見るに三劫成佛の文のみありて卽身成佛の文なし如何と詰り。次で華嚴の僧は、卽心卽佛は佛の教へなれども卽身成佛とは世を迷はす邪說なりと論じ。三論の僧は根據なき臆說を唱ふるは之れ正法を紊るものなれば宜しくその宣布を禁止すべしと叫び。口角泡を飛ばして、一座の英匠は辯才を揮ひ、論難の刃を研き、攻擊の鉾を揃へて、大師の教へを非議し、眞言の教義を粉碎せんとせられました

併し彼等が鉾を鋭うして迫ることは密教をいやが上にも光輝を增さしむることなり論難の火花を散らすことが大師の學德を一層發揮せしむる所以となつたのであります

大師は靜かに聞き終りて一膝進められました、一座の眸は大師の一身に注がれました

大師は爽かなる無碍の妙辯を揮つて二經一論八ケの證文を擧げて、卽身成佛は一個の臆說にあらざることを論斷し、之れを知らざるは智見淺きが爲にして、卽身成佛は佛

教の眞髄なりと喝破し、六大四曼三密の幽理を詳論して、あらゆる論難を完膚なきまでに説破せられました、その有様は恰も野を燎く猛火の烈々と燃え立ちて、尾花に交る小草の一葉をも漏さゞるが如く、苟くも教義に關する論難は些細の異議をも恕されなかつたのであります。其の辯才は富留那の辯舌にも過ぎ、その智慧は佛の示現かとも怪しまれ、卽身成佛の旨、文義明かに顯はれ、祕密最上の趣き疑ひを挾むの餘地なきに至り、諸宗の碩德は皆口を閉ぢて抗辯することができなくなりました

されば心の内には猶疑ひを挾み、『口にては何んとでも言へる』けれど、『實際には迚もできることでない』と口々につぶやきました。律宗の一僧は此の疑念を代表して大師に向ひ、文證は御説によりて知ることを得たれども卽身成佛の人證を求めることはできますまい、と尋ねられました、すると大師は言下に大日如來、金剛薩埵は其の人證であると仰せられました。此の時天皇陛下の仰せらるゝには、『卽身成佛の教義文證は明瞭になりたれど、その成佛の光景を今こゝに眼前に見ることができぬとあつては眞實の信を決定することができないが、その點は如何にや』、との御勅問がありました

その時大師は靜かにうなづかせ給ひ、さらば一座の方々の疑念を解かんが爲に現證をお見せ申さんとて、北面したる身を南方に向け嚴かに大日の智拳印を結び、三摩地の觀念に入り、口の内に密語を誦じ給ふこと旦しなりしが　殿中俄に眩く覺えるほど明くなつてきたので、一同は驚き怪しみて不圖頭を上げて見れば、燦爛たる光明は大師の御身より輝いて居る、これはとばかり列座の人々は開きたる口を塞ぎもあへず、目を見張り瞳を凝らして見れば、面門見る見る中に忽ちに開けて金色の大日如來と成り頭に五佛の寶冠を現じ、座下に微妙の蓮華を生じ、目前に卽身成佛の光景を拜し天皇は大に驚かせ給ひ玉座を下りて頂禮し、公卿百官は座を退いて拜禮せられ、南北諸宗の學匠は地にひざまづいて稽首せられ、卽身成佛に對する疑ひはさらりと此の時氷解し、穢土を捨てずして淨土の相を顯はし、凡身をそのまゝにして佛身を現はし給へるを見て、何れも歡喜と慚愧の涙に咽ばれたのであります

暫らくありて大師は元の本體に還へられ、今まで玻璃の淨土と見えし清涼殿には駘蕩たる和風吹き、大日如來の御姿と拜まれたる大師の面上には莞爾たる微笑が見え、生佛不二の實證をこの時明示せられました。學匠も碩學も事實の前には議論の餘地なく衣の袖を搔き合せて今の今まで論難したる口を噤みて慚愧の思ひに目を伏せられました。その席に列したる道雄、道昌、源仁等の大德はこの宗論を動機に何れも改宗して大師の御弟子になられたと云ふ說があります。このことありてより天皇の御歸依は一段の深きを加へ、密敎の光りは愈〻照り輝いたのであります

四條院嘉禎二年の官符には我が大師は淸涼論談の莚には佛陀光りを放ち、乾臨閣修法の砌には眞龍形を現す、祕密の効顯奇異はかり難しとのたまひ

又、鳥羽院長承二年の官符には忝なくも大師の本體は大日覺王十方諸佛の能化にして、垂迹は之れ三地の薩埵、六趣群生の歸する所なり、大日の法燈をかゝげて普く日域を照し、圓海の智水を灑いで永へに海內を濡すと仰せられてあります

九、大師の御著作

大師の思想信仰を知るにはその著書を拜讀することが一番の近道である。大師の著書にして今日現在せるものは約三百卷ほどあります。それを長谷僧正の編纂せられた弘法大師全集に皆な載せられてある。まだ此の外に散失して見當らない書物も大分あるらしい、併し三百卷と云へば少い方でない、勿論其の中には後人の僞作であらうと思はるゝものもあり、又短い書物も段々あるけれど、十住心論、付法傳、祕府論、三敎指歸、寶鑰のやうな大作もある。これ等の書物は一部作るにも却々の事でない、特に其の文章は華麗莊重を極め、一字一句も苟くもせられてない、實に千錬萬鍛を經たものと拜せられる

その著作の重なるものを分類して見ると、一は敎相に關するもので十住心論、寶鑰二敎論、卽身義等の如きがそれである。二は事相に關するもので祕藏記、御作次第、

念誦法、戒序等の如きがそれである。三は相承に關するもので付法傳、御請來錄、所學目錄等の如きがそれである。四は梵學に關するもので字母釋、悉曇章等の如きがそれである。五は遺訓に關するもので二十五ケ條の御遺告、出家修道の御遺戒等の如きがそれである。六は文學に關するもので文筆眼心抄、性靈集、文敎祕府論等の如きがそれである。七は神道に關するもので天地麗氣記、兩部鈔、十種神寶圖等の如きがそれである。八は雜部に屬するもので實語敎、玉造小町書、太子廟參拜記等の如きがそれである。大師の御著作は此の如く多方面に亙つて居ります

右の內にて卽身義は淸涼殿の宗論に刺戟せられて卽身成佛の原理を記述せられたものであります。寶鑰は法相、三論、天台、華嚴等の各宗を十階級に分ちて、それを順次比較して眞言宗の最も勝れたることを判定せられたるものであります。二敎論はその比較判定の形式を變へて、各宗を一々眞言宗に直に對比して、顯敎は劣り密敎は勝る所以を論定せられたものであります。祕鍵は疫病祈禱の爲め天皇の命を奉じて心經を講贊せられたものであります。性靈集は大師の詩歌文章を集められたものであります。祕府論は作詩法幷に文法などを詳述せられたものであります。祕藏記は惠果和尙の祕密に關する重要口授を大師が筆記せられたものであります。その他二百幾十部の製作の時代及び製作の動機幷にその內容等を一々こゝで紹介することは迚も出來ませぬから、篤志の方は別の方法により御研究を願ひます

十、眞言宗根本道場の確立

大師は王城の地に密敎宣布の中心道場を得る能はざることを年來久しく遺憾に思召されて居たのであります。高雄山、乙訓寺、東南院等は眞言の法幢を樹立する根本道場としては餘りに規模が小さい爲め、どうも氣足らず思召して居られたのであります處が嵯峨天皇は弘仁十四年藤原良房を勅使として、東寺を大師に賜ふ旨御勅宣を下されました。大師の御喜びは實に譬ふるにものなきほどでありました。大師は直に東寺

を眞言密敎の根本道場と定められ、唐より傳へ來れる一百餘部の經文、三國相承の佛像、佛舍利・袈裟、法具等を悉く皆な東寺の寶庫に納め、寺の名を敎王護國寺と改められました。大師の御喜びになつた有樣は今尙歷々と目に見るやうであります、『弘仁帝賜ふに東寺を以てす歡喜に勝へず』と仰せられ、東寺を根本道場と爲すべしと遺命せられ、『ゆめ〳〵他人をして雜住せしむること勿れ、此れ狹心の爲めにあらず、眞を護るの謀なり』と諭示したまひ。又東寺の住職は宗內にて一番偉い人を推薦せなければならぬと云ふので、大師は特に長者と命名せられ、大師の第一高弟たる實惠大德を以てその後任に定められたる一事に徵するも、大師が如何に東寺を大切に思召されたかを窺ひ奉ることができると思ひます。東寺の長者は御修法の大阿闍梨も勤めねばならぬ、二間の觀音供の導師も勤めねばならぬ、晦日の御念誦も勤めねばならぬ陛下の御下問にも奉答せねばならぬ、護持僧にもならなければならぬ、さういふ重大なる責任があるから年齡順だ法臘順だと云ふやうなことをいつて居てはならないぞと大師は堅く御遺命遊ばされたのであります。東寺に五十人の定額僧を置き、三學を習學せしむべき勅許を仰ぎ奉られたるもそれが爲であります

東寺は元左寺と云つたこともあり、東鴻臚館といつたこともあり、官舍であつたのであります。その官舍を大師に賜はつたのについては、そこに一つの因緣がある、それは唐の靑龍寺は元官舍であつたのを、唐帝が惠果和尙に賜はり、惠果和尙はそれを密敎の根本道場にせられた、その例に準じて弘仁帝は大師に東寺を密敎宣布の根本道場として賜はつたのであります。天長二年大師は講堂を建築せられ仁王會の本尊たる五佛、五菩薩、五大忿怒、梵天帝釋、四天王等の諸尊を安置せられました。その翌年は五重の塔を建築せられ、續いて金堂を建て、食堂、坊舍等を建立せられました。東寺の建築物は大師自ら設計せられ、親しく指揮監督の下に建てられたものであります今の金堂、講堂は豐臣氏が改築せられたもので、大塔、灌頂堂、は德川氏が造進せられたものである。金堂、西院、食堂、大塔、諸門等は特別保護建造物になつて居りま

す。これ等の建物は古來幾變遷を經てきたけれ共、其の樣式結構は依然として建築學上貴いものであります、東寺の建物は大師の御創建だから貴いと云ふばかりでなく、之れを美術上、建築學上より見て弘仁式建築の特色を知るべき唯一の大切なる建物であります。大師は建築上に於て特歩の樣式を示され、世に云ふ弘仁式の建物と云ふのは大師の考案せられたものにて、弘仁式の特色は唐土風を日本化し、顯教式を密教式に改められた點にあるのであります。保元平治の頃は東寺の建物はひどく零落して、堂舍傾き、佛像は雨露に打たるゝほどになつて居りましたが、例の高雄の文覺上人が痛く之れを歎きて大に興隆に力め、五重の塔を始め、諸堂を修繕して舊觀に復せしめました

東寺は嵯峨天皇より賜はつて以來、丁度千百年になります、その間にありて盛衰興廢は變遷を經たのであるけれど、眞言宗の根本道場たるべき事の高祖の御遺訓は一般宗徒の心裡に牢記して忘れない所であります。東寺は我等末徒にとりて信仰上、宗史上忘るゝ事のできない重寶靈器が最も多く藏められてあります。彼の有名なる七祖像の如き、犍陀穀子の袈裟の如き、三國相承の佛舍利の如き、後宇多天皇の御起請の如き、何れも千萬金にも替へられない重寶であります

此の東寺と相對して、西寺と云ふがありました、其西寺の住職が彼の有名な守敏僧都と云ふので、學問も優れ、法力も秀でゝ居りましたが、何分にも品性が惡く、心が歪んで居たので、常に大師の名望を嫉み妬み、事毎に邪魔を爲し、大師が神泉苑にて勅命を奉じ雨請ひの祈禱をして居られると、守敏僧都は窃に雨を降らさぬ樣に妨害の祈禱をせられたと云ので、今に『釋迦に提婆、弘法に守敏』と云ふ諺さへあります

十一、珠の如き御人格

大師の御名は幼童牧兒に至るまで之れを知らぬものなく、諺に太閤は秀吉にとられ、大師は弘法にとらる、と云ふほどに大師の名は一般の人に能く知られて居る、否

知られて居るばかりでなく、能く一般に尊信せられて居る、大師は凡人でない、佛樣の化現である、その靈德は赫々として不思議の神力を有し給ひ、善あるものには幸を與へ、罪あるものには罰を下し、その應驗のあらたかなることは響の聲に應ずるが如く、影の形に隨ふが如しと信ぜられて居る、大師は今日多くの人々より人間を超越したお方として信ぜられて居るのであります

併し今假りに大師を一個の人間として考へて見ても、その偉大なる人格は吾等の修養上、信仰上、思想上の模範として大に敬慕すべき點が多いのであります。大師の人格は實に春風の如く溫かい思ひやりの深い、そして活き〳〵とした華々しい性格を具へて居られたのである、大師の爲人は、知れば知るほど偉大にして、崇信すべく、實に理想的偉人の典型たる、立派な人格を備へられて居たのであります。大師の御傳記中より假令に神秘的方面の記事を一切除き去つても、尙大師の偉德は赫々として萬衆に光被し、理想的人格者として道德的師表たる御德と技能を具へて居られたのであります。大師の靈驗奇跡はかういふ偉大なる人格を透して現はれる神秘的靈力であつたのであります。故にその奇跡には一々道德上の光りが輝いて居り、信仰上の妙趣が湧いて居るのであります

大師の御人格は溫乎たる珠の如く、圭角のない穩和な御方であられたから、常にできる丈爭ひを避け、衝突を避けられたやうであります、彼のマホメットが右の手に劍を持ち、左の手にコーランを擎げて、征服的に傳道したなどゝは趣きが變つて居る。又日蓮上人が四個格言などの如き喧嘩腰の布敎方針を執られたのとは大變に違つて居る、大師は何處迄も春風の洋々たるが如き態度を以て、萬衆に望ませられたのであります

今一二の事實を擧げて見るならば、法相宗の德一菩薩と云ふ人が大師の敎義に對して攻擊の矢を放たれましたが、大師は一向に相手におりなさりませんでした、それは其の論點が闇夜の鐵砲に等しいからでもありませうが、爭ひを避けると云ふ御氣風が

こゝにも現はれで居るのである。又傳教大師が釋論に對し數個の疑點を擧て僞作であると云はれましたけれど、大師は他を向いて爭ひをお避けになりました、此の時若し大師が堂々御論辯を遊ばされましたならば必ずや傳教大師との間に論端が開かれたに違ひないのであります。大師は一方に於て傳教大師と親善を結ばれたばかりでなく南都諸宗とも親善の交りを結んで居られたのであります。そこで南都諸宗と傳教大師との間に論爭が倍々激しくなるや、大師はその渦中に捲き込まるゝを迷惑に思召され、どちらへ贊成を表する譯にも參りません所からその問題に就ては一言半句も意見を漏らし給はず、漂然として東北巡教の途に上られたのであります。大師が南都諸宗と親善の關係を有せられたことは大安寺の別當に擧げられ、東大寺の別當に推され給へるにて如何に南都諸宗が大師を推重したりしかを窺ふことができます

大師は此の如く穩和にあらせられましたから、その御一代は順風に帆を上げられたるが如く、何事も眺向に何事も思ふ通りに、とん〳〵拍子に成せられたのであります。されどその教義上の御主張に至つては堂々として一歩も讓り給はず、法相、三論を六七の住心に攝し、傳教大師を目前に据て、天台宗を第八の住心に判じ給へるなどその抱負の雄大にして、その識見の高遠なる、恰も衆星に對する明月の如く、獅子一吼して群獸慴伏するの慨がある。之れを要するに大師の御性格は穩和の裡に凛々とした所があり、平和の間に犯すべからざる氣高い權威を保つて居られたのであります

十二、嵯峨天皇の御叡信

嵯峨天皇と弘法大師との御間柄は御叡信と申すよりも御親密と申した方が適切かとも思はるゝほどに、その御交りは親しく濃かにあらせられたのであります。先づ御叡信の方面より申せば、天皇は大師を師として祕密灌頂の壇に入らせ給ひ、二間の觀世音を宮中に安置せさせ給ひ、大師と俱に神道灌頂を受け給ふに際し、陛下は同じやうな揃ひの服裝を二枚拵へ、一枚は自ら召し、一枚は大師に下賜せられました、それが

今日の素絹の濫觴になつて居ります。それから又高野山開創の時には勅を下して興隆を助け給ひ、又東寺を賜はりて密教の根本道場と爲し給へる等、眞言宗の今日あるは偏に嵯峨帝御叡信の力に依ると申してよいのであります。更に又知音蘭契の御親しみ深かりし點より云へば、嵯峨天皇と我が大師とは御即位の始めより親しき關係を有し給ひ、藥子の亂があつて以來一入御交りが深くなり、特に天皇は詩文並に書道に造詣深かりし爲め、大師とはその趣味を同じくせられ自然その交りも濃かなるに至りしものと思はれます。書道のことについては度々合作のやうなことをせられたり、批評の仕合を遊ばされたり、宮城諸門の額を天皇と大師と逸勢の三人が手分けをして揮毫せられたと云ふやうなこともあり。又ある時は帝が祕藏の書帖を取り出して唐土名士の親筆なりとて大師に誇示せられしに、それが大師が在唐の時に書いたものであつた抔と云ふやうな滑稽に等しい逸話などもあり。現に帝と大師との間に應答せられた詩文章が澤山性靈集に載せられてあります

大師が高雄山に籠りて禪定を修せられたとき、帝は綿一百屯と『遙に想ふ深山春尚寒きことを』と云へる御製の詩一篇とを賜はり、大師亦之れに和韵せられたことあり又ある時は大師勅命を奉じ屏風を二双書きて之れを奉還する時、古調十韵の詩を賦して天皇に奉りしに、天皇はその屏風を御覽になつて叡感斜ならず、御製の詩を賜はりたることあり。又、『海公と與に茶を飲み山に歸るを送る』の詩を詠じて賜へることあり。その他韵文の往復及び表文消息の往來など一々枚擧に遑がないほど澤山あります。特に高野山の地を大師に賜ふに際し、表て向き公文の官符は紀伊の國主に下し、その艸案文を大師の御手元へ私かに御内送下され、それが今高野山の國寶になつて居ると云ふやうなことを以て見るも、その御交情の並みなみならざりしことを拜察することができやうと思ひます

更に他の方面より大師の社交上に於ける御有樣云何と云ふに大師はあらゆる方面に親しみと懷みを有せられ、道俗その風を欽し、上下その德を慕ひ、その居る所常に

市を爲すと云ふ有樣でありました。唐士に於ては一留學生の身を以て王公、縉紳と交りを結び、或ひは詩歌を唱酬し、或は文人墨客と往來し、密教研究の傍ら別に風流韵事を以て文華燦爛たる唐朝の士人と誼を交へ、時に或は離合の詩を作り、時に或は惠果和尙の碑文を草し、殆ど彼の國の文士をして後に瞠着たらしめ、大に異邦に我が國光を發揚せられたので、眞濟師は、『詩翰ともに美にして東方君子國の風を興せり』と讃嘆してあります。日本へ御歸朝後は一層その御交際が廣くなり、殊に大師は當時の新智識として大陸文明の傳來者として、朝野の尊敬を受け、恰も衆星の北辰に向ふが如く、知るも知らぬも大師に交りを求め、一世を擧げて大師に歸嚮すると云ふ有樣でありました

十三、傳教大師との御道交

傳教大師と弘法大師は平安朝時代に於ける二大偉人である、此の二大偉人は同時に出でゝ一は天台宗を開き、一は眞言宗を弘めたのである。通常なれば兩雄の間に何等かの爭ひが起るべき筈である、然るに兩大師は何等の爭ひもなく何等の蟠りなくその交りは芝蘭の香ばしきが如く、常に相助けて、互に教化に力められたるは、啻に當時の偉觀たるのみならず、實に後世の龜鑑であると思ふ。兩大師は同時に入唐せられたが風波の爲めに妨げられ、唐土に於ては相會ふの機なく、歸朝の時も二人は別れわかれに歸つたから相會ふの機會がなかつたのであります。大師が歸朝せられたと云ふ話を聞くと、傳教大師は早速慰問の書を寄せられ、大師はその答禮を兼て大同四年の春、叡山に登つて傳教大師と好誼を結ばれ、平安佛教の二大偉人は茲に始めて直接に交通するに至り、それより兩師の間次第に親しくなり、その八月傳教大師は弟子の經珍なるものをして大師に儀軌、悉曇等十二部の祕書を借らんことを乞ひ、續いてその翌年は大師書を傳教大師の下に致して悉曇の疑義を質され、その年九月傳教大師は頭陀の次でを以て大師の住職寺なる乙訓寺へ來訪せられ、其の晩は泊つて懇話淸談殆

ど夜を徹せんとし、遂に其の冬高雄山に於て灌頂授受の約を結び、十一月高雄山に於て先づ金剛界灌頂を受けられたのであります。傳教大師は我が大師より八歳上にて先進者であり先輩であり其の學德は百世の師表として、上御一人を始め一般道俗の尊敬甚だ深く、その聲望は朝野に轟き渡つて居られたのである。かゝる高德が後進者たる我が大師の門に來りて法を受けられたと云ふことは、偏に法門を重んずる美しき大雅懷に依れるものにて、凡僧愚輩の思慮の及ぶ所でない。兩大師の御心事は實に明鏡と明鏡と相對したるが如く、一點の汚れなく、清く澄み渡りたる眞諦門上の御交りであらせられたのであります

我が大師の御交友は千百人の多きに達したれど其の中にて尤も御交遊の深厚なりしは、嵯峨天皇と傳教大師とであります。嵯峨天皇と傳教大師とは我が大師と交際せられた朝野名士の中にて尤も蘭契の交りが深かつたのであります。嵯峨天皇は古今の明主と稱せられ、傳教大師は教界の英傑と稱せられ、俱に平安朝時代の代表的偉人であり、其の兩雄が我が大師と尤も親しき交際を結び、その三人の間に往復せられた詩歌文章等が千年後の今日に尚多く現存して居ると云ふことは興味深い史實であります

大師は此の如く嵯峨天皇並に傳教大師等と御交りが親しかりしのみならず、遣唐使藤原賀能、副使菅原清公、橘逸勢等を始め左大臣藤原冬嗣、小野朝臣岑守、内膳の正仲雄王、下野の大守東博士、廣智禪師、筑前の大守等とも交りを結び、互に消息を通ぜられたので、其の往復文書が現に諸書に散見して居ります

十四、いろは五十音の御製作

今日我れ〳〵の用ひて居る、いろは假名、五十音假名は共に弘法大師の御製作であります。いろは假名は高野山大塔建立の時大工に木材の符號として用ひしむる爲め作り與へられたものだと舊記に出て居ります。此のいろは假名が今日一般に公用私用上どれほど廣大なる便宜を與へて居るかは多言を要しない事で、殊に我が國の和歌は、

太古は五七調でありましたが、それがいろは歌ができて以來七五調になつたので、七五調の歌はいろはが起原になつて居るのであります。そして此のいろは歌は啻に字母となり語原になつて居るばかりでなく、此の四十七字に深い尊い哲學上の大眞理が含まれて居るのであります。世界各國何れの國にも字母はあります、けれども我が國のいろはの如く字母其のものに深い意味を含み優美なる歌調を帶びたものはどこにもありません、いろは歌は涅槃經の四句の偈の意を歌によまれたものであります

此のいろは歌は大師ならでは作られないと云ふ二つの理由があります、一は梵字上に深い造詣がなければ作られないと云ふことゝ、今一は草書に獨特の妙手を有せなければ作られないと云ふ事で、此の二つを兼ね備へたる作者は大師の外に求める事はできないのであります。いろはは其の字體と云ひ、音韻と云ひ古來未曾有の名作で、我が國民が容易に他國の言葉を覺え、百般の學理を習ひ得るに敏捷なる所以は、全くいろは歌の恩惠であります。支那の陶宗儀と云ふ人の書いた書史會要であるとか、或は

陳明庭の著はした音韻字海であるとか云ふやうな書物には羨望的態度を以ていろはの音義を種々に詳釋歎美いたしてあります

次に五十音假名は大師が唐にて般若三藏より習ひ受けたるサンスクリットの原則を應用して作られたものであります。然るに一部の人々は吉備大臣が唐土にて王化玄に反功の法を學んだ時に王化玄が書いてくれたものに基いて拵へたのだといつて居るものがありますが、それは大なる間違ひであります。五十音假名は梵字の素養なくして決して作れる筈のものでない、然るに吉備大臣が悉曇を習つたと云ふことはどこにもない、のみならず若し支那人が書いてくれるほどなら支那には疾くの昔に便利此の上もない五十音假名は盛んに行はれて居なければならない筈であります。片假名の作者が何人なりやを疑ふものあらば大師の傳へてこられた梵字の五十字門圖を一見するがよい、すればすぐ領解されるであらうと思ひます。大師がこの五十字門の音を取りて日本的の文字に改造せられたるは大日經字輪品の旨趣を宣明せんが爲めでありました

大日經の眼目要點は阿字の一字にある、その阿字より母音の五字が流れ出て、五字の母音より子音の四十五字が流れ出る、其の子音母音を約める時は元の阿字の一字に歸結する、大師は梵字を透して子音母音の關係を學び、喉牙齒舌唇の五音の關係を知り遂に此の五十音圖を製作せらるゝに至つたのであります。漢字中より或は扁のみを取り、或は旁のみを採つて日本式に特種の五十音圖を作られたのであります

此の二種の假名の製作によつて日本の文化は非常に促進せられたのであります。若し此の兩假名がなかつたならば、我々日本人は支那人と同樣に彼の難かしい漢字のみを用ひなければならなかつたのかも知れないのである。それを思へば大師の御恩は實に廣大であると申さねばなりません

十五、四國八十八ケ所靈場

四國靈場は大師の開かれた雄大なる公園であります。阿波、土佐、伊豫、讃岐の四國の島を一つの公園として、そこに八十八ケ所の靈場を設け、山を登り、河を渡り、谷を越え、海を眺め、知らず識らずの間に山水の靈氣に觸れ、心目を清めしめやうと云ふ雄大にして嶄新なる御考察の下に開創せられたのであります。故に四國を巡拜するものは啻に病苦を癒し給ふのみならず、心の懊惱を除き、敎化の利益窮まりなく、詩趣に富み、宗敎味に富める實に有り難き善巧方便であります

四國の靈場は大師御在世の砌親しく御足跡を印せられたる遺跡にして、求聞持を繰られた所もあり、御修行遊ばされた所もあり、妖魔退散の祈禱をせられた所もあり、そして其の足跡を印せられた所に追々佛堂が出來て、寺院ができたので、杖を立てたばかりの所にも寺ができ、御憩みになつた丈の所にも御堂ができ、御泊りになつた所には伽藍ができ、一歩に一人を濟度し、一日に一村を敎化せられ、其の御遺跡の因緣談は昨日か今日かありしことのやうに今以て次から次へ人々の間に語り傳へられて居るのであります。四國の各縣に散在せる靈山、名蹟、景勝の地は大抵靈場の内に加へ

られ三里に一ケ寺、五里に一院、或は佛堂あり、或は神社あり、全島を宗教的一大遊園地として、その山水を彩るに梵閣靈場を以て莊つてあるのであります

此の四國の靈場の由來に就て、ある書には弘仁六年大師四十二歳の厄災消除の爲めに四國の島を巡見し、八十八ケ所の靈場を開創せられたと云ひ。ある書には天竺の般若三藏より釋迦如來の靈場たる八塔の土を御傳來になつて、八塔の八を八十とし、それに元の八を加へて八十八ケ所に其の土を分布せられたと云ひ、又ある書には八十八使の見惑の煩惱の數に擬へて開かれたと云ひ、種々の說がありますが、大師は始めより何ケ所と定めて御巡錫あそばされたのではなく、その御遺跡の數がいつの頃よりとはなく、御芳躅を慕うて巡拜するものが、次から次へ云ひ傳へ、書き傳へ聞き傳へて自然に今日の如く八十八ケ所に定めらるゝやうになつたものと思はれます

其の靈場の一番二番の順序なども如何なる來由の下に定められたか明かでありません、今より二百五十年ほど以前に寂本と云ふ人があり、四國靈場記と云ふ書を作り、四國巡拜の順序は先づ善通寺を始めにせねばならぬ、善通寺は大師の御誕生所だから此處を第一番として、それより札所の順を定めねばならぬと主張したけれど、習慣の力は容易に改めることができない、今にそのまゝになつて居るのであります。それで其の札所は阿波に二十三ケ所あり、土佐に十六ケ所あり、伊豫に二十六ケ所あり、讃岐に二十三ケ所あり、都合八十八ケ所になるのである。本尊は藥師如來は二十三ケ所千手觀世音が十三ケ所、十一面觀音が十一ケ所、阿彌陀如來が十ケ所、釋迦如來が五ケ所、地藏菩薩が五ケ所、正觀音が四ケ所、虛空藏と不動明王が三ケ所づゝ、彌勒、文殊、馬頭、毘沙門、大通智勝佛等が各一ケ所づゝであります

福來博士は四國靈場を庶民道場だと嘆美せられましたが、春秋の彼岸頃には幾百萬の老若男女が靈場巡拜の爲め、北海道からも、滿鮮からも、九州からも、東北からも日本全國から集り來り、菅笠金剛杖の裝ひ輕く、續々として南無大師の聲絕ゆる事なく。又土地の人々は之れを遍路と稱して尊敬と親愛の情を捧げ、巡拜者の旅情を慰む

べく接待と云ふ事を盛んに行ふのである、接待とは施しの意味にて、巡拜者に草鞋、半紙、炒豆、餅、壽司、うどん、白米、赤飯、賽錢、納經錢等思ひ思ひに施しをする又足弱の巡拜遍路を乘せた接待俥も往き、日あたりよき緣側に女髮結の接待もあり、男は髭剃り接待から肩揉みの施しまである。何んと云ふ美しい習はせでありませう、四國は全く一種の理想的樂園であります、そしてそれは祖先の追福又は御禮報謝の意味にて行はれるのであります。それを個人にて接待するあり、數戸又は一部落聯合にて接待するあり、此の接待に往くことを各村部落とも何れも年中行事の一つとして樂みの一つに算へて居るのであります。又夕暮の頃となれば座敷を清め風呂を湧かして一夜を無賃にて泊めてくれる善根宿と云ふのが在々所々に澤山ある

四國靈場には今も尙靈驗奇蹟多く、毎年あすこで躄が立つた、こゝで盲目が明いたと云ふやうな話が澤山あります。大師は、『分身を諸所の遺跡に影現すべし』との御誓ひ空しからず、今も活きてござるのである。日々影向を缺かし給はぬので、信ある所には必ず影現して利益を施して下さるのである、かくいふ信仰は一たひ四國を巡拜するものゝ痛切に感ずる所で、此の信仰の爲めに憂悶も除かれ、苦惱も拂はれ、世にも人にも見捨てられたる不幸の人々も、大師の溫かき慈愛の御手に慰められ救はれるのであります

十六、御巡錫の遺跡

大師は青年の頃より深山大澤の跋渉を好ませられ、性靈集には、『我れ少うして山水を愛す』と仰せられてあります。今日のいはゆる山岳探險であります、但し大師の山岳跋渉は今日の探險と少し其の意味が違つて居りました、心身を鍛錬すると云ふ點は同じでありますが、今一つその上に山靈の氣に接して靈力を感得しやうと云ふ大なる目的の爲めに毎に人煙絶えたる深山に分け入りて修行を積まれたのであります

大師は東は關東東北地方より西は四國九州のはてまで、殆んど足跡遍からざるはな

く、そして到る所に堂を建て、寺を創し、佛種を蒔き教化に努められたのであります。先づ東の方より申しますと、東北地方へは入唐前に一度と、弘仁年間に一度と二度御巡錫になりました。第二回目の時は眞濟、幹海など云へる弟子を連れて五ヶ月間ほど巡歴せられたのである、其の時會津の磐梯山惠日寺を開き、柳津に虛空藏菩薩を安置し、信夫の靈山寺に錫を留め、湯殿山より金華山へ登り、到る所に法益を施し、歸路下野の日光に至り中禪寺に詣し、二荒山の名を日光山と改め、更に江の島の龍窟に入りて護摩を焚き辨才天を勸請し、日向藥師に行基の遺跡を訪ひ、大山石尊靈區に良辨の跡を訪ひ、相州中部には弘法山と云ふあり、箱根權現に參り、富士山に登り、筑波山に攀ぢ、轉じて曾遊の地たる伊豆半島を巡教せられました、彼の修禪寺は大師の開創にして修禪寺溫泉は大師の發見によりて開かれたものであります、從つて獨鈷水などゝ云ふ大師に因める湯名があり、其の外大師は日本國中諸所に溫泉を見出して人民に溫泉の沐浴を教へられ、又石炭が燃料たることも大師によりて始めて教へられたの

であります。此の弘仁年間の東北御再遊は傳教大師と南都諸宗との爭論を避けんが爲めであつたと傳へられて居ります。又東北地方より御歸りの際、北陸地方を經て歸京せられたと云ふ說があります。彼の越州草生津にて坐禪の僧油を乞ひければ、大師巖石を加持せられしに油忽ちに湧出して絕えずと日記にあるのはその時の事にて、其の湧出したと云ふ油は今日の石油の事だらうといふことであります

それから次に四國、九州、中國方面の事は前章に一寸申して置きましたから、こゝには略して、近畿地方の御遺蹟を瞥見する事に致します。久米寺にて大日經を感得し高雄山にて灌頂を修し、大安寺の別當に任ぜられ、東大寺の內に眞言院を草し、左大臣藤原冬嗣の爲めに奈良の南圓堂を建て、小栗栖に靈水を出して三鈷寺を創し、室生山に三國相承の重寶を納め、大峰山に登りて靈巖中に菩提心論、釋論等を埋められ、河內の龍泉寺に惡龍を度し、犬飼山や、柴水山、九度山の慈尊院は大師御母子の因緣厚く、又山城の珍皇寺の如き、大和の弘福寺の如き、河內の聖德太子御廟には大師百

日間參籠せられ、河内の高貴寺や、和泉の槇尾山には柴手水の靈跡を遺し、攝州甲山にては淳和帝の妃如意尼に灌頂を授け如意輪の像を彫まれたる等、此の外まだ大師御因縁の神社佛閣は澤山あらうと思ひます。又和泉の大鳥郡にて嫗なる女が獨りの男の兒を狼に嚙み殺され非常に泣き悲しめる所へ通りかゝり大師はふびんに思召され咒を誦して加持し給ひしに忽ち蘇生したと云ひ。或は住吉の浦にて犢子が大師の御言葉を聞き分けたと云ひ。或は宇治川を渡りて渡賃なかりし爲め舷に字を書きて與へしに其の字を削りて呑めば諸病が癒へたと云ふやうな御事跡は到る所に數限りなく澤山あります。大師御一代の行化は啻に言葉の教化、文書の傳道ばかりでなく、現益を施し、法益を與へ、燃ゆるが如き大慈悲を以て苦しめるものを助け、惱めるものを救はれたのであります

十七、大師の庶民教育

大師が掉尾の一大事業として特筆大書すべきものは僧俗一切を教育すべき目的の下に建てられたる私立學校の開創であります。それは綜藝種智院と名けて藤原冬嗣の賛助の下に京都九條に建てられたのであります。敷地は二町餘と云へば相當に廣かつたやうであります、建物も大鄕左京の邸宅であつたのだから相當に廣かつたのと察せられる。開校の式を擧げたのは天長五年十二月十五日にて、大師が五十五歳の御時でありました。學校の經費は十方有志の喜捨に依ることゝし、生徒の食費等は一切學校より支給することになつて居りました

其の當時藤原氏は勸學院を建て、在原氏は奬學院を興し、橘氏は學館院を設け、和氣氏は弘文院を立て、それ〴〵自己一族の子弟に限りて收容し、專ら自家一門のみの榮達を圖つて居りましたが、綜藝種智院はさういふ狹い目的の下に建てられたのではなく、廣く一般の子弟を收容し、庶民を教育するの目的の下に建てられたのであります

明治二十年頃の事であつたと思ひますが、東京の某新聞社が主催にて、古來日本に於ける國民教育の第一功績者は何人なりや、と云ふ問題を出して、其の人選投票を廣く全國より募集した、その時に弘法大師は大多數を以て第一位に當選せられた事があります。勿論新聞の投票などによつてかゝる大問題を決せらるべきではありませんが大師が庶民教育の開創者であると云ふことは隱れたる一大事績として、知る人は知つて居ると云ふことが之れにて判ると思ひます

大師の設立趣意書を拜見すると實に堂々たるものである。上流社會の子弟はそれぞれ自己一門の學校に入りて教育を受くることを得れども、中流以下の庶民の子弟は師を尋ね學を修むる便を缺き、可惜希望と才能と有爲の資を抱きながら空しく無學文盲に終るもの多きを憐み、一方に僧侶修學の門戸を大ならしむると共に、一方には庶民子弟に修學の路を與へ、平民的私學校によりて學事上の一大缺陷を補ひ、以て文化の普及に力められたのであります。其の時の設立趣意書は性靈集に全部載せられてあります。其の中には教授法から、教師の心得、生徒の心懸け、及び經費問題等に至るまで詳記せられてあります。教授科目は五明、十藏は申すに及ばず、儒教、道教佛教の三教を並べ教へ世間の官位を志ものには世間學を專ら教へ、僧道を主とする者には佛學を主に教へ、眞俗を一堂の內に會して一大異彩を當時の教育界に放つたのであります。彼の實語經、文鏡祕府論、文筆肝心抄、執筆法等はその教科書の一つとして著はされたものと見ることができるのであります

然るに此の如き有益の事業も大師の入定と共に其の志を嗣ぐ人物に乏しく、承和十四年遂に廢校の止むなきに至つたのであります

十八、大師の國家觀

大師は鎭護國家を以て立教開宗の一大要件とせられたので、眞言宗は國家の御爲と云ふことを何時も前提にして居ります。御祈念をするとか、御祈りをする際などはい

つも國家の御爲と云ふことを第一番に唱へ、又佛を禮し經を讀み說敎などを致す時でも國家安穩、寶祚延長と云ふことを必ず御祈念する規則になつて居る。從つて大師は天皇より高雄山を賜はつた時、寺名を神護國祚眞言寺と改め、又東寺を賜はつた時もすぐ敎王護國寺と改められました。そして國家の御爲に大師は五十幾度の大法を修せられ、宮中後七日の御修法を恒例の法會とせられ、弘仁七年十月天皇御不豫にあらせられた時、大師は護摩を焚きて御平癒を祈られたとか、又朝廷攘災の御祈禱を行はれたとかいふやうな事は大師の國家に對する御信念の那邊にあらせられたかと云ふことを證明するものであると思ひます

大師は斯くの如く法義上に於て國家主義を提唱せられた許りでなく、實際上に於ても大師は國家皇室の御爲に力を盡されたのであります。其の一例を云へば弘仁二年藥子の亂がありました際の如き、大師は親しく嵯峨天皇の御相談相手となり天下の治平を謀られたのであります、故に其の亂が片付きますと平城天皇は大師に從つて祕密の

灌頂を受けられ、皇太子高岳親王は剃髮して大師の御弟子となり、名を眞如法親王と改められ、嵯峨天皇もその翌年大師に從つて冷泉院に於て灌頂を受け給へるなど、その間の消息を窺ひ奉ることができると思ひます

大師は鎭護國家、濟世利民の大權化であり、日本的佛敎の提唱者、權威者であると共に、勤王護國の第一人者でありました。大師の御主張は我々日本國民は大眞理の懷に目醒めて、潑溂たる自覺と信念とに生き、自他兼濟の實を擧ぐべき大乘菩薩たる素質が十分に純熟し切つて居る立派な良民でなければならない。吾人は世界に冠絕せる日本帝國の堂々たる國民である、何等の自覺もなく統一もなき人類の集合であつてはならない、貴賤貧富の區別なく等しく國家的生命に於て統一し、愛國的精神に於て一致した、大調和ある國民として俱に〳〵眞理の體現者にてまします所の天皇の大御心を奉戴して、國法の體現者となり、而して永恒に朽ちせぬ眞理に向つて奮鬪努力しなければならない。則ち天皇の大御德を奉體して、君民同治の實を現はし、世界無比な

る我が國體の精華を發輝し、國威を發揚せしめ、淨土を現實の此の國家の上に實現して、寶祚萬歳、帝國萬歳を謳はしめんとせられたので、之れ則ち大師の徹底せる國家觀であり、又永遠の意義ある最も健全なる國家主義であります

今大師の國家觀の特色とも見るべき二三を擧ぐれば、第一に眞言宗の寺院は皆鎭護國家の祈禱道場たることを一大要件とせられてあります。第二に大師は兩部神道を鼓吹して、我が國固有の神祇と印度傳來の佛菩薩とを完全に融合調和せしめられた事であります。第三に大師は卽事而眞の敎理に基きて純宗敎の立場たる眞諦門と、國家的立場たる俗諦門とを、圓滿に調和せしめられたことであります。是等の點につき國家は凡ての宗敎に對して甚深の注意を拂ひ、其の一々の宗敎につきて、國家を擁護する宗敎なりや、將た國家を呪咀する宗敎なりやを十分に調査しなければならない。若し國家の存立を呪咀し、危險を奬勵するが如き宗敎が若しありとすれば、それを其の儘に放任する時は秩序亂れ、人心荒み、遂に國家の存立を危ふするなきを保せられないのである

特に近時は世界思潮の影響を受けて、あらゆる方面に少からぬ動搖を感じ、幾多の重要問題は犇々と吾等の眼前に押し迫つて居る、吾等國民の責任は實に重大である、吾等は大師の敎へを奉體して徹底せる自覺と信念とに根ざせる健全なる國民思想と眞摯なる國家觀念を把握し、以て多岐多端の問題に對して判斷を誤らないやう十分の省察をせねばなりませぬ。我等は今や日毎に移り往く世界思潮の眞只中に立つて居るのであります

十九、大師の社會事業

大師は感化並に救濟等の社會事業に種々御盡力になりました。第一に學校を建てゝ貧民敎育に力められました、貧民と云へば語弊があるか知れないが、兎に角敎育を受くることのできない中流以下の一般子弟に對し給費制度によりて廣く敎育を施された

のであります。第二には施藥院を設けて貧民の救濟に力められました、それは綜藝種智院式に、『東は施藥の慈院に隣り、西は眞言の仁祠に近し』と云へるにて、學校と病院と修道院との三つを並べ行はれた模樣が分ります。第三には靈力の救濟であります、それは病苦に惱めるものに對しては加持祈禱の靈益を施し、醫師に見放されて絶望の淵に悶ゆるものには、溫かき救ひの手を垂れ、慰安と救濟を並べ行はれたのであります。第四に大師は道なき所に道を通じ、橋なき所に橋を架けられたのみならず、農業に必要なる池をあちらこちらに築かれました、讃岐の萬濃の池とか大和の益田の池とかゝそれであります。又水脈を敎へて所々に井戸を澤山掘らせました、その一二を云へば筑紫の弘法水、槇尾の智慧水、高野の閼伽水、宇治の大師井戸等の如きがそれである、それが飲料水として、灌漑用として今に多くの人を益して居ることは申すまでもありません。第五に燃料に用ゆる石炭の使用法を始めて指示せられたこと、石油の使用法を創めて敎へられたこと、溫泉の沐浴を發明せられたこと、染料を發見せられ

たこと菓子の製法を唐より傳來せられたこと、筆の製法並に墨の製法を唐より傳來せられたこと、煎茶の製法を唐より傳來せられたこと等は普く人の知る所なるを以てこゝには略して措きますが、是れ等の內何れの一つに就て考へても實に重大なる御事蹟と申さねばなりませぬ。第六大師のお生れになりました時は丁度大正の今日と同樣に國民一般に思想の安定を缺いで居りました、それは神佛の關係並に儒敎と佛敎との紛糾等の爲めでありました、大師は先づ神佛の關係に就ては兩部神道と云へる解決法を宣示せられ、又儒敎道敎に就ては孔子老子は儒童迦葉の二菩薩の權化なりと唱破せられました、そこで神佛の爭ひも三敎の爭ひも根本的に一掃せられました

又佛敎各宗間の軋轢並に對國家觀に就ても大師は鎭護國家と云へる大方針の下に統一せられたのであります、之れにて當時岐路に立つて居た國民精神の歸嚮はつきりと一筋に定められたのであります。第七に大師は人の恐れて近寄らない人跡絶えたる深山幽谷に分け入りて、自らそこに修行を凝らし、世人の恐怖を救はれたのでありま

す。日本の高山にして大師の足跡を印せない所は殆どないと云ふ位で、高野山の如きもその一つであります、高野山は今尚狼などが時々出てくる位だから、當時猛獸毒蛇の棲家であつたに違ひない、さういふ所へ錫杖一本で只一人攀ぢ登らうと云ふには命がけの大信念がなくては迚も登れる譯のものでない、大師は其の人煙稀な危險を冒して開拓に力められたのであります、四國の靈場などを巡つて見ると高い山や深い谷で今でも隨分恐ろしい所が多い、毒蛇を退治せられた穴だとか、猛獸を退治せられた所だとか、或は妖魔を退散せしめた跡だとかいふやうな遺跡が、そこ此處に澤山ある無論大師が自ら鍬鋤を執つて土工に從事せられた譯ではありませんが、人の恐れて近寄らない深山や、森林の中へ分け入つて、七日間或は三七日間、長きは百日間の祈禱を凝らして、そこへ佛を祭り、堂を建て、最早恐るゝに及ばないとの安心を與へ、道を開き、橋を架けられると、今まで恐れて居たものも段々近寄つてくる樣になり、人家ができ、部落ができ、遂に村邑市街ができるやうになつたのであります

二十、兩部神道

大師が日本固有の神祇を大切に尊崇せられたと云ふことは、高野山開創の時高野明神を祀りて眞言守護の神と爲し給ひ、或は嚴島明神の御告げと云ひ、宇佐八幡の影向と云ひ、東寺の伽藍守護神の說と云ひ、或は藤森社の緣起と云ひ、伏見稻荷の勸請と云ひ、又伊勢朝熊山に上り求聞持作法の時太神宮の託宣ありたりと云ひ、賀春明神に參拜せられたと云ひ、中臣祓、兩部抄等を著したと云ひ、天地麗氣記を作られたと云ふなど、中には如何はしく思はるゝものなきにあらざれど、兎に角大師が神祇に對する關係の淺からざる事を知ることができます

從つて明治維新までは各地に社坊とか、別當とか、宮寺とか云ふものが澤山ありました、それは其の神社の主宰者として祭事一切を司つて居つたので、全國には一萬五六千もあつたのであります。其の中には天台宗の寺もありましたが多くは眞言宗の

寺でありました。昔は神と云ふ觀念が朦朧として居りましたが、大師の説明によりて神祇に對する一般の思想信仰が明白になり、佛教徒の態度も大師の宣明によりてきつぱりと決定するに至つたのであります。大師は神を敬ひ神祇を重んずるの念深く、啻に神社の興隆に力を盡されたるのみならず、祈禱修法等の際は必ず日本の八百萬神に法樂を擎げる事を忘れなかつたのであります。行基、良辨等は本地垂迹説を以て神佛の調和を謀られましたけれ共、それは夢想神託等によつて説いたもので、その根本が今一つ明確でありませんでした。然るに大師は兩部不二と云へる教理上の根據に基き、神佛一體の思想を鼓吹せられたのであります。本地垂迹説は佛本神末の思想に出立して、神は佛よりも劣れるものなりとの傾向を帶びて居りましたが、兩部神道は神佛同體の思想に出立して、二者は卑尊の區別なく、日本に現はれて神道となり、天竺に現はれては佛道となり、名は異れども諸人を教化し、民人を指導し來れる功德に至つては同一である、故に神を信ずるもの佛を歸依するに同じく、佛に歸依するもの神を信ずるに異ならず、神佛不二同體と云ふのが大師の御主張でありました。此の御主張によりてさしもに行き詰まつて居た蘇我、物部以來の爭論は完全に融和せられたのであります。そこで弘仁十三年紫宸殿に於て兩部神道の教旨を講演せられたやうな事もあります

此の兩部神道の創始は嵯峨天皇と弘法大師とが御一緒に神祇官の智治麻呂より宮中にて神道灌頂を受けられたのに濫觴して居ると傳へられて居ります。そして其の祕事相傳は天皇と御相談の上吉田家へ、總て預けられたと云ふので、維新前までは吉田家が兩部神道の本家總司と云ふことになつて居りました、此の吉田家の相傳の外に眞言宗には三輪流であるとか、御流神道であるとか、或は雲傳神道であるとか云ふやうな支流があり、それらは凡て輪王の大事、四海領掌の大事と云ふ事を唯一の奥義として傳へられて居ります

二十一、大師の書道

唐帝より五筆和尚の號を賜ひ、嵯峨天皇は草聖と稱し給ひ、時人は三筆と稱する程に大師は書道に秀でゝ居られたのであります。大師の書道上に於ける靈腕は古今獨歩にして、他に比すべきものがないのであります、今日尚現存して居る大師の御筆が稀にちらほらとありますが、それは實に千金もたゞならぬのであります。七祖贊であるとか、座右銘であるとか、風信帖であるとか云ふのは其の内の最も優秀なるものと云はれて居りますが、夫れが不思議な事には一々書風が違つて居るのであります。風信帖の書風と十喩の詩跋の書風とはころりと違ひ、七祖贊の書風と益田の池碑銘の書風とは丸切り違ひ、其の書體は千變萬化に展開されて居ります。世に傳ふる大師樣と云ふ書風は其の内の一變體にして、恐らく大師の本色であるまいと云ふ說さへありますされど大師の書風に傍正を分つことはできません、大師の書道論によりますと『時に依り物に應じて、變化のあるのが用筆の活趣にして、擬すれども似ず百家の體別なる所以なり』、と仰せられ、法を四時に取り、形を萬類に象ると論ぜられてあるのはそこの事です。大師の書道論は性靈集に載せられてあります、日本にて書道を論じたるは大師が嚆矢で、その論旨は幽を極め玄を盡して居るのであります

遷都以來嵯峨帝の頃まで皇城の諸門は假建でありましたが、弘仁二年に至り愈〻四方の十二門が立派に出來上りました、そこで嵯峨帝は大師に南方の應天門、朱雀門、美福門の三門の額を書せられん事を勅せられ、橘逸勢は北方三門、天皇は東西の六門を御揮毫あらせられました、此の三人を當時の三筆と稱せられた事は有名な話であります。處がその後彼の小野道風が大師の額を評して、『美福門は田廣し、朱雀門は米雀門』と嘲けり笑ひしに、其の冥罰にや忽ち筆持つ手の自由を失ひ、爾來手わなゝきて手跡もそれより異樣になれりと著聞集にあります、小野道風の震ひ書きと云ふのはその後に書いたものであります。大師の書は眞に入神の妙に達し給ひ、曾て伊豆の桂

谷にて虚空に向ひ大般若經の魔事品を書き給ひしに金色の文字現はれ六書八體の點畫亂るゝことなかりしと云ひ、唐土の長安城にて神童に出會ひ流水に文字を書き給ひしに少しも亂るゝことなかりしと云ひ、又嵯峨帝金剛定寺の額を書かしめんが爲め高雄山へ勅使を立てられしに折柄霖雨の爲め清瀧川の水漲り渡ることができない、それを知つて大師は川を隔てゝ揮毫せられたと云ひ、又應天門の額を書くとき應の字の點を打つことを忘れ、門に掛げて後に拋筆法により點を打たれ、それより弘法も筆の誤りと云ふ諺ができたと云ふ俗說があります

大師は始め日本に於て魚養に書道を習ひ、後唐土に於て韓方明より王義之の奥旨を傳へ、歸朝の後先づその傳ふる所の筆法を嵯峨帝、淳和帝に授け奉り、次で五法、十二點、八十一勢等の法規を一般に示し、又執筆法、使筆法等の要訣を敎へられたのであります。その書法が書博士の家に傳はりて轉々相傳ふる間に之れは韓方明の傳である、之れは嵯峨帝の傳である、之れは大師の傳である抔と氷炭背馳の說を爲すやうになりました。けれ共それは後人の私議臆度に外ならないのであります。契筆正傳に書體種々ありと雖も皆その法則は大師の授筆眞書法十二點にて之れを盡くす、之れ則ち皇帝に口授し奉れるの筆法なり、此の法書博士の家に傳はり今尙連綿たりといへるはその眞を得たるものであります。されば日本の書道を統一し、組織的に書を敎へ以て其の歸嚮を示されたるは偏に大師の御力に依るものにて、大師は實に日本書道の太祖と申して宜しいのであります

二十二、大師の繪畫と彫刻

大師は文章も上手であり、詩賦も莊麗であり、筆法も妙を究め、繪畫も善く描き、彫刻も巧にあらせられ、往くとして佳ならざるはなかつたのであります。之れは大日經に眞言宗の大阿闍梨は兼綜衆藝とて何んでもできなければならぬと說かれてあり、特に繪や、彫刻は本尊を描き、又は佛像を刻む爲めに是非辨へて居らねばならないと

說かれてあります爲め、大師は繪を描き彫刻をせられたので、道樂や、遊戯の爲めでは決してありません、止むに止まれぬ信仰上の必要に迫られての御事であります

大師の御筆と傳へらるゝ繪畫にして、現に政府より國寶に指定せられて居るものが相當澤山あります。京都東寺の龍猛、龍智の像、高野山普門院の勤操僧正の像、八幡講本尊の五大力菩薩、龍光院の船中湧現の觀世音、金剛峯寺の狩場明神等四十點餘りあります。又これから國寶に指定されるであらうと思はるゝものも大分あり、現に鑑査狀付とか、鑑定中とかいふものも少くない。それから國寶以外のものにして大師の御筆と稱せらるゝものに至つては全國にどれだけあるか見當が立たないほどある。勿論それが皆悉く大師の御筆とは信ぜられないが假令大師の眞筆でなくとも國寶になるほどの立派なものが大師の御名によつて一千餘年の今日に傳はり、美術上の御手本として、文化を資益したと云ふ丈けでも、そこに深い意味があらうと思ひます。殊に大師の御名を假りて、其の畫の價値を高めんとする、その事が取りも直さず、大師の畫の優秀なりしことを立證して居るものとも考へられる

又彫刻に就いても大師の御作と傳ふる佛像佛畫が全國には大分あります。此の寺の本尊は弘法大師の直作である、彼の寺の本尊も弘法大師の御作であると云ふ風に大師の御作と傳ふるものが澤山あり、その中には現に政府より國寶に指定されて居るものも三十餘點あります、東寺の不動尊像、高雄山の藥師如來、弘仁寺の明星菩薩、觀心寺の如意輪、南院の波切不動明王、高野山金堂の金剛薩埵等の如きがそれである。右の外鑑査狀附とか鑑査中とか云ふものが澤山あり、又國寶になつて居なゝけれども大師の御眞作として道俗ともに信じて疑はないと云ふやうな佛像も全國には大分ある。斯樣に大師の御作と稱するものが餘りたんとあり過ぎる所から、平子氏などのやうに大師の彫刻說を全然否定し抹殺しやうとする論者も現はれた譯であります。併し澤山あり過ぎるから大師の彫刻は全く嘘だと斷定するのは餘りに亂暴の議論である、勿論大師の御作と傳ふるものゝ中には僞作もあり、名を借りたものもありませう、それは

今日現存せる彫刻家の作品に付いてもさういふやうな噂や、傾向があるのを見ても考へ合はすことができる。論より證據と云ひますが、大師の御作には一種獨特の妙所があり、他人の企及を許さない神趣が宿つて居る、大師系の彫刻は卓然として一家を爲し、其の作風は奈良朝のものとも異り、傳敎系のものとも異り、祕密儀軌に依れる莊重にして雄渾なる大師獨歩の妙技は嶄然として一頭地を抜いて居ります。故に眞作であるか、僞作であるかと云ふことを見分けるは必ずしも六ケしいことではない、それは一、弘仁式の特色と云ふこと、二、作品の年代と云ふこと、三、刀力の利鈍と云ふこと、此の三つの淨玻璃鏡を以て鑑定する時はすぐ眞僞が分るのであります

尙此の大師の繪畫彫刻に就ては先年六大新報誌上に於て數回に亙り評論したことがありますから、篤志の方は御參照を願ひます。明治政府の編纂せる日本帝國美術史にも、『空海は素より博學宏才、文學諸藝に通達し、圖繪の法を傳へ、後世造佛の模範を垂れしのみならず、又自ら許多の畫を描けり』と云つてあります

二十三、大師の十號と十像

大師の御名は十種あります、又御肖像も十種あります。御名のことは村上天皇の御勅問に對して寬空僧正が十種の名を擧げて奉答せられたことがあります。それは應和元年九月のことであります、寬空僧正は天台座主延昌僧正と同時に參內し、天顏に咫尺して顯密の法義につき御物語りの折り、陛下より弘法大師にあまたの名ありと云ふが如何やとの御尋ねがありました、其の時寬空僧正は十號を奏答せられたと申すことであります。十號とは、一には眞魚、二には貴物、三には神童、四には無空、五には敎海、六には如空、七には空海、八には五筆和尙、九には遍照金剛、十には弘法大師であります。其の中弘法大師の御名は醍醐天皇より賜はつたのであります、それは御入定後八十年ほどを經て、延喜二十一年天皇靈夢を感じ給ひ、その年十月二十七日勅使として平惟扶卿、廟使として觀賢僧正を高野山に差遣せられ檜皮色の御衣と諡號

の勅書とを賜はつたのであります。其の時觀賢僧正は親しく大師の御尊容を拜せられたと申すことであります。それから次に遍照金剛の號は唐土にて灌頂をお受けになりたる時、惠果和尚より賜はりたる御名にて、御入定後八十ケ年間ほどは、『南無遍照金剛』とお唱へ致して居たのであります。それが弘法大師の諡號を賜はつてより『大師』の二字を加へて唱へるやうになつたのであります

次に大師の御肖像に亦十種あります、一には、瞬目大師と云ふ、之れは大師が入唐留學に際し母君へ記念の爲め自ら描きて與へられたものであります。二には、高野大師と云ふ、之れは眞如法親王が大師御入定前に描寫せられ、大師自ら點眼せられたと、傳ふる御尊影であります。三には、祕鍵大師と云ふ、之れは大覺寺にあり劒を持つて居られます。四には、寶冠大師と云ふ、之れは清涼宗論の御姿にて寶冠を戴いて居られます。五には値遇大師と云ふ、之れは狩場明神と向ひ合つて立つて居られます。六には、北面大師と云ふ、之れは東寺御影堂の本尊にて椅子に倚らず、皇室守護の御影であります。七には、廿日大師と云ふ、俗に裸大師とも申します。八には兒大師と云ふ、童形にて蓮華に座して居られます。九には、順禮大師と云ふ、鐵鉢を持ち立つて居られます。十には入定大師と云ふ、之れは左の掌を仰けて能作生の寶珠を載せ、右の掌にて之れを覆うてござるのであります。右の内にて普通一般にお祭り致して居るのは高野大師と申す御影にて、左の手に數珠を持ち、右の手に五鈷を持ち、御影の上に三鈷松、蛇柳、高野山、などの圖が描かれてあります。瞬目大師と申すは、五鈷と數珠は高野大師と同じでありますが、御影の上に捨身が岳幷に釋迦如來放光の圖が描かれてあります

二十四、高野山御開創

高野山は密教有緣の地にして、大師御開創の當初より種々の神祕を宿して居たのであります。大師が始めて御登山の際は大和宇智郡の山中にて獵者に化現せる狩場明神

に出會ひ、その召連れたる黒白の犬に導かれて高野山に登られたと云ひ、山に登りて山上の光景を見渡し給ふに不思議や茂れる松の木の間より光明の輝けるものあり、怪しみて近寄り給へば先年大唐明州の海岸より、密敎有縁の地を相せよとて空中に擲げ給ひし所の三鈷杵でありました、今日も三鈷松と云ふ名勝が遺つて居ります。又大塔建立の砌には地中より長さ五尺廣さ一寸八分の寶劒と、金銅の經軸と、輪寶との三寶物が出てきました。其の寶劒の銘に、『釋迦如來說法地、迦葉尊者成道所』と彫まれてあつたと云ふことであります。斯樣に高野山は種々不思議の因緣に富んで居るのを見ても密敎有緣の靈地たることを知ることができます

大師が高野山を開かれたる動機は、高雄山は都に近くして俗事多く、規模小にして千歲不滅の法燈を挑ぐるに適せず、殊に多くの末弟子を修行せしむるには華奢風流を見聞せざる閑靜の地を求めなければならない。役の行者は大峰山に攀ぢ、泰澄は越中の立山を開き、勝道は日光を創し、傳敎大師は比叡山を開きて王城の鬼門を鎭めて居る。我が眞言密敎を天下に流布せんには是等の靈地にも勝りたる靈地を搜さねばならないと念願せられ、こゝに弘仁七年の春都を出で、近畿の諸山に攀ぢ、大和の連峰を踏破して、遂に高野山を搜し當てられたのであります。登りて見れば申分なき靈地にて、大師の久しく心に描いて居られた理想に適つて居る、幽靜なる平原は數千町歩に亙り、三面は山を以て繞らし、辰巳の方角が開けて、三十六谷の水淸く、禪定修行に最もよく適して居ることを見定められたのであります。此の邊は曾て大師靑年の頃吉野、大峰を經て一度跋涉せられしことあり。又紀州豐田丸よりしば〳〵高野山は他に求められない靈地なる由を傳へ聞き、いよ〳〵心動きて登山せらるゝに至つたのであります

それより大師は一たび都に歸り、更に高弟信叡法師をして地理を調査せしめられ、重ねて又實惠、泰範の二師をして地相地勢を勘へさせ給ひ、遂に愈修禪入定の靈域密敎相應の靈地たる事を確信せらるゝに至り、その年六月十九日高野山を入定の所と

して賜はらんことを請ふの表を天皇に上られました。その表の文は靈氣と確信と至誠が充ち滿ちて居ります、其の全文は性靈集に出て居ります。天皇はその請ひを允許して、七月八日大政官符を紀伊の國司に下されました、北は紀伊の川を限り、東は丹生川の上、南は當川の南なる長峰、西は神勾の谷を限りとして大師に賜はつたのであります。官符の公文は紀伊の國司に下されましたが、其の案文は公家より大師に內送せられ、大師之れを書き寫されしに、畏れ多くも嵯峨天皇は之れに御手判を賜はつたのであります。今國寶として高野山御影堂の寶庫に藏められてあります。大師は歡喜して泰範、實惠の二法師を督し、其の年の秋より高野山開創に取りかゝられました。豐田丸の子にて大師の弟子となつて居る圓明律師は師の命に依つて專ら土木の事に關係し、同八年四月より七間四面の金堂を建築することゝなり、大師は京都より高野に登り、內外に大結界を行はれました、其の啓白の文は莊重雄大を究め、一たび之れを讀むものは大師の大光明心に接するの思ひがせられます、大塔を中心として七里四方を境內として結界せられたのであります。其の一里は六町一里であります、斯くて木を伐り、藪を拓き、地を坦して、工事を急がせ給ひたるも、冬は寒さに閉ぢられて雪いと深ければ極寒中は一先づ工事を休止し、春の景色の花咲く頃を待ち再び都より大工左官等を登らせ、先づ僧院僧舍を造營せしめ、閏四月より金堂の建築に取りかゝりそれが出來上ると尋で鐘樓を建て、大炊屋、西塔、中院等を立て、五月三日兩所明神を勸請して伽藍守護の神と崇められました。天長九年の秋彼の名高い萬燈會を勸められたのであります。弘仁十年六月根本大塔の建立に取りかゝられました、大塔は二重にして高さ十六丈の塔でありました。一丈六尺の大日如來と、一丈四尺の四佛とを安置し、瑜祇經に依りて金剛峰寺と名けられました

されど何分にも大工事のことゝて工事捗々しからず、動もすれば行き惱まんとするを見て、承和元年八月十方の信男信女に廣く寄附を募集するの勸進帳を發表せられました。けれど遂に落成式を擧ぐるに至らずして、大師はその翌年三月御入定あらせら

れたのであります。大師は高野山開創に就て、弘仁七年より承和二年まで、二十ケ年に亙り、經營に努力せられたのであります。御入定に際し萬事を眞然大德に委ね、『荒廢せしむる勿れ』と堅く遺命せられ、尙實惠大德に眞然大德を援助して造營を完成せしむるやう懇に御遺囑あらせられたのであります。併し御在世中にあらゆる御計畫は九分九厘まで出來上つて居たのであります。寺院も多く出來、僧侶も多く住し、昔に變はる盛大を極めて居つたので、承和二年に鑄造せられた梵鐘の銘に、『尊容堂に滿ち、禪客房に溢る』とあるを見れば大師御入定當時の高野山は修禪の僧雲の如く集り堂宇殿舍亙た既に大半出來上つて居たものと思はれます。眞然大德は其の遺業を承けて、經藏、食堂、中門などを造立し、大師の御計畫はこゝに全く完成せらるゝに至つたのであります

高野山の開創に就ては大師が御入定の前年親しく御執筆あらせられた金剛峰寺開創緣起と云ふものがあります。當時の事情を知る唯一の記錄であります、後に畏くも

天皇の御手印と御國判とを賜へるより御手印緣起と稱し、千載の鑑と貴ばれ、後醍醐天皇此の緣起を叡覽ありて、更に御手印と御奧書とを賜はり、高野山の祕寶として現に寶庫に藏められてあります

二十五、大師の御遺訓

化緣限りあり入寂の期の近づけることを覺えさせられ、天長十年秋の頃より大師は隱棲の御志次第に厚く、先づ大僧都の官職を辭し、次で高雄山を眞濟僧正に讓り、更に東寺を實惠大德に付囑し、東大寺の眞言院を眞雅僧正に付し、室生山を堅惠法印に與へ、高野山を眞然大德に囑し、其の他の關係諸寺皆夫れ〳〵處置あらせられ、高野山に隱棲し給ふの御用意を遊ばされました。此の旨を聞き傳へて、上は天皇陛下より、下は貴賤老若國司郡司に至るまで皆深く別れを惜み參らせ、親しく尊容を拜せんことを希ひ、まのあたり敎化に與らんことを願ひ奉り、或は物を贈り、或は書狀を

以て誠を擎げ、いかなれば玉を懐いて山に隠れ給ふぞと悲しみ痛み、御引止め申したれど、大師は、『命や涯りあり留むべからず』とて遂に眞如親王、杲隣、眞然等の御弟子を従へ高野山へ御隠棲遊ばされたのであります

斯くて大師は承和元年十一月十五日實恵、眞濟、眞雅等の諸弟子を高野山に呼び集め、『諸の弟子等諦かに聞け、我れ金剛定に入つて肉身を此の山に留め、天下の人法を守らんと思ふ、その期は明年三月二十一日寅の刻なり、汝等悲しむこと勿れ、我れ生身は定に隨ふと雖も、我が法身は永く世間に住すべし、我れ始めは思へり、住世一百歳にして衆生を濟度せんと、然れども汝等の成り立てるを見るが故に心を安んじて今禪定に入らんとす、我れ定中にありて常に汝等の善惡の作業を見るべし、滅後の弟子等我が姿を見ざるを以て必ず懈ることなかれ、我れ入定の後必ずまさに都率天に往詣し、彌勒慈尊の御前に侍るべし、五十六億の後彌勒菩薩と共に二たび世間に出で我が先跡を問ふべし、又旦らく未だ下らざる間は微雲管より見て信否を察すべし、此の時つとめあらんものは幸ひを得せしめん、不信のものは不幸ならしめん、ゆめ〳〵後に疎かにすること勿れ』と懇に御遺訓がありました、之れを聞きて諸の弟子等は悲しみ肝に銘じ、涙に袖を絞つたのであります

それより大師は穀味を斷ち專ら禪定を好み給ひしが、翌年三月十五日入定の期愈〳〵迫れることを感じ、更に再び諸の弟子を集め最後の御遺訓を垂れさせられました。その御遺訓は懇切叮嚀を極め、親しく二十五ケ條の遺訓書を認めて遺されたのであります、其の御遺告は釋尊の遺教經にも比すべき大切なる御遺訓にて、其の中には東寺長者の人選に關すること、御修法奉修の心得に關する事、定額僧に關すること、室生山に關する事、如意寶珠に關すること、東寺を根本道場とすべき事、東寺長者を依止師とすべきこと、傳法灌頂に關すること、高野山に關すること等を詳しく懇に御遺命あらせられ、更に、『意を等うして上下評論する勿れ』と仰せられ、『遺告を誤ること莫れ一を得て萬を知れ』と諭され、『吾れ滅度の後は兩部の三寶に歸信せよ、自然に吾

れに代つて眷顧を被らしめん』と誡められてあります。其の御遺誡は實に一句毎に熱情と至誠が溢れ、諸の弟子をして感奮の涙に咽ばしめられたのであります

此の御遺訓の眞筆の本は今現に高野山御影堂の寶庫に納まつて居ります。元は東寺の寶庫にあつて一宗の長者にあらざれば披覽するを許されなかつたのでありますが、中世所々に轉々して居たのを、後醍醐天皇の頃、醍醐寺座主文觀上人が永く高野山御影堂の寶庫に納められたのであります

二十六、高野山御入定

天淡く曇りて朝より頭重く覺ゆる、承和二年三月十五日、諸の弟子を召して大師は中院御坊に於て最後の御遺訓を垂れさせられました。實惠大德を始め諸の弟子等は餘りの悲しさに頭を擧ぐるものさへなく聲を呑むばかりでありました、その後大師は淨室に入り、穀味を斷ち、結跏趺座して毘盧の三昧に住し給ひければ、諸の弟子

達は前後に圍繞して異口同音に彌勒菩薩の寶號を唱へ奉る。斯くして十八日、十九日、二十日と時日は移れども定體は更に動することなく、息風漸く微なれども、御姿は少しも異らせらるゝことなかりしが、豫て御遺言の如く果して三月二十一日の寅の刻に至り、奄然として大定に入らせられたのであります。御年六十二歳であらせられました、御眼を深く閉ぢたれば禪定に入り給ひしならんと推量するのみにて拜み參らせたる所、生身に異ならねば世人の如く荼毘に附せず、嚴然と元の儘に安置して世の禮に準じ、七日々々の追福を勤められました。然るに御顏の色衰へず、頭髮長く伸びければ剃刀を加へ、衣裝を整へ、五十日を經たる後、實惠、眞濟、眞雅、眞紹、堅惠眞曉、眞然、眞如等の高弟替はる代るに御輿を舁ぎ奉り、定身を奥之院に供奉し、轉軸山、楊柳山、摩尼山の三山の中央にて姑射山に對し、石壇を疊みて僅に人の出入するほどゝし、その口に五輪塔を建てゝ梵字の陀羅尼を藏め、佛舍利を入れ、靈塔を建立せられました。御葬送の供に列したる弟子一萬餘人、其の外結緣の道俗數を知ら

ずとあります。修行縁起に唯眼を閉ぢ言語なきを以て入定と爲すのみ、自餘は生身の如し、顏色衰へず、鬢髮更に長しと云へるにて、其の御有樣の一端を窺ひ奉ることが出來ると思ひます

かくて大師は終に永へに高野苔の蒸す岩がげに御入定遊ばされたのであります、吁、明星は雲に隱れ、月は朧に大塔の影に傾き、四衆悲しみに滿ち、滿山寂として聲だになく、各衣の袂をしぼり、哀悼の涙に咽びました。さてあるべきにあらねば供物を擎げ、法樂を供へて、梵唄歌賛の聲心耳に澄み、金磬鐃銅の響き絶ゆることなく、懇に御追善を祈られたのであります。大師御入定のことほどなく都へ聞えければ天皇陛下は殊の外御嘆きあり、內舍人を勅使に差遣せられ、賻を賜ひ、特に御離別を嘆かせ給ひ、三日間の廢朝を仰せ出されました。又嵯峨上皇は殊に御歸依深かりし爲め、別に院使を以て送りもの並に優渥なる御弔書を下し賜はりました。身後の光榮は喩へやうのないほどであります。御弔書の文は

眞言洪匠、密敎宗師、邦家憑其護持、動植荷其攝念、豈圖崦磁未迫、無常遽侵、仁舟廢掉、弱長失歸、嗚呼哀哉、禪關僻在、凶問晚傳、不能使者奔赴相助荼毗、言之爲恨、曷已、思忖舊窟悲涼、可斷令旨、遙寄單言弔之、著錄、弟子、入室、桑門、悽愴奈何、兼以達旨、

吾等は此の弔書を拜讀する毎に涙の滂沱たるを禁じ得ないものがあります。禪關が僻在の爲め凶問を傳ふること晚しと仰せられ、使者を赴かしめて荼毘を助けしむることのできなかつた事を遺憾に思ふと仰せられ、啻に大師を弔ひ給ふばかりでなく、門弟に對しても御溫かき鄭重なる御慰問の御言葉を賜はる等、實に帝王の尊きを忘れ、同窓同門の人の如き、御情誼の厚き、御友情の深き唯だ感泣の外はないのであります

終に申添へて措きたいのは、大師は死滅せられたのではなく入定せられたのであります。纂要に、『定力を以て永く依身を留む』と云へるはそのことで、肉身を留めて彌勒の出世を待ち、二佛の中間に於て國家人類を利益すると云ふことは、支那にも日本

にも例のないことで、唯だ天竺の迦葉尊者が佛の袈裟を傳へて彌勒菩薩に奉らんが爲め鷄足山に入定すと傳へ。又清辨菩薩眞言を修して石窟を開き、阿修羅の宮殿に入り、生身を留めて彌勒の下生を待つと云ふことがあるのみであります。右二者の入定と大師の入定とはその意味内容が大變違ふのでありますが、それは信仰問題、教理問題に亙るからこゝには略して擱きます

二十七、大師の靈光

八葉の峰は玲瓏として浮塵を拂ひ三十六谷の水は涓々として俗情を清む、大師は高野山に入定し給ひたれど、その靈光は赫々として今に照り輝き、東密の法水は洋々千載に流れて絶えず。一たび清凉殿に大日如來の御姿を現はし給ひてより、大師は凡人にあらず、大日如來の應現なりとの尊信の念は、啻に當代の人心に肝銘せられたるのみならず、御入定後に於て一層其の念を強められ、一休禪師の如きも、『生身大日覺王尊』と讃歎せられ、不滅の靈光は今尚信あるものゝ胸に光被されて居ります

大師が文化の發展に寄與せられたる御功績は今更申すまでもありませんが、我れ等は更に敬虔の衷情を擎げて千古に卓越せる偉大なる御靈格と、最も仰ぐべき定力不思議の御神驗が萬衆の心靈界に活動して無限の救ひと慰めと感化を施されつゝあることを感謝せずには居られないのであります。大師は廣大なる誓願を垂れて微雲管裡より日々分身を影向し無比の利益を施して居られるのであります。其の御誓願の中に、虛空盡き、衆生盡き、涅槃盡きなば我が願ひも盡きなんと誓はせ給ひ、日々化身を降して有縁の衆生を加持護念して現當の祈願を成せしめんと契ひ給ひ、我れ定惠力を以て彼等を攝取し龍華の證明にあづからしめんと仰せられてあります。こゝを以て今日大師を信仰するもの何れも大師を單なる人格者、指導者として崇敬するにあらずして、大師を直に信仰上の本尊として二世の利益を祈り、佛陀として歸依の誠をさゝげて居るのであります。故に他宗の信徒が其の宗の祖師に對する歸依渇仰とは大にその趣き

を異にして居るのであります。我等は大師の教へによつて觀世音を信じ、藥師如來を頼み、地藏菩薩を仰がんとするにあらずして、直接に大師に縋り奉りて諸の願望を叶へさせて頂き、又安心信仰を得させて頂かうとして居るのであります

大師は肉身を高野の定窟に隱し給ひたれど、心靈は永く此の土に活き復りて、所々に分身を現はし無窮の利益を施して居られるのであります。彼の四國順拜の信者が一面には大師の現罰を恐るゝこと、世の兒孫が嚴父に對するが如くなると共に、一面には大師の恩寵を仰ぐこと、世の子女が慈母に對するが如くなるを見ても、大師の靈德が千載の下如何に人心感化の上に生きて働き給へるかを看取することができやうと思ひます

延喜二十一年十月二十一日の夜、大師は天皇の御夢の裡に影現して御衣を賜はらんことを請ひ、『高野山むすぶ庵に袖朽ちて苔の下にぞ有り明けの月』と詠じ給ひければ、天皇大に驚かせ給ひ、同月二十七日直に平維助卿を勅使として高野山に差遣せられ、弘法大師の諡號と、檜皮色の御衣とを賜はりました、觀賢僧正は廟使として其の時その御衣を供へ奉らんが爲に廟窟の扉を開かれしに、朦朧として雲霧の立ち隔たるが如く、聖容を拜すること叶はず、僧正涙を流し默然として祈り、深く罪障を懺悔せられしに、暫く經ちて雲霧晴れ渡り滿月の出づるが如く尊容を拜せられたと申すことであります。斯くてより歷代の御叡信倍々深く、天皇、皇后、皇子、皇孫等にして大師の法孫となり給ひし方々多く、恒寂親王先づ大師の門に入りて出家し、宇多天皇仁和寺に入つて眞言の阿闍梨となり給ひ、それより相次で朱雀天皇は寛空僧正に從つて御落飾あらせられ、圓融天皇は寛朝僧正に從つて御出家遊ばされ、白河天皇亦勝覺僧正に從つて灌頂を受けさせらるゝ等、天皇陛下にして大師の法孫とならせられたる御方が二十六代ましますのであります。殊に四條天皇は大師の法孫たる俊仿國師の夙緣を思召されて、京都泉涌寺を歷代の香華寺と定め給ひ、後宇多法皇の如きは東寺興隆の御起請に宸翰を染めさせられ、『高祖傳法末資阿闍梨金剛性』と御署名遊ばされて

あります。金剛性とは法皇御出家後の御名であります。かゝれば上下靡然として大師の教風に靡き、僻陬邊鄙の在々所々に至るまで大師の靈光を仰ぎ、大師の尊影を安置し、大師の寶號を唱え、到る所に新四國を設け老若男女踵を接して巡拜を爲し、或は大師講を組み、或は供養を營む等、これ偏に大師の聖德靈光の活きて働き給へる明證であります。嗚呼玉川の水清し、汲みて心を洗ふべく、八葉の峯高し、仰いで大師の法益に浴すべきであります

弘法大師御傳記 終

大正十年三月十五日印刷
大正十年三月廿一日發行
大正十年四月廿一日二版發行

第二版

著作者　蓮生觀善

發行者　京都市寺町通松原南植松町七百十七番地　一井利喜藏

印刷者　京都市北小路新町西入井筒町六百五十九番地　須磨勘兵衛

版權所有

發行所　京都市寺町松原南　全正舍
電話下六八五番
振替大阪二六九三番

新刊書籍　寄附帖
社寺繪端書　過去帖
風景寶物帖　京表具
佛畫調進　莊嚴具

Uth
600

終